

会報

Since 1999

【お知らせ】今年度上半期のバザーは中止といたします

毎回留学生から大好評のバザーですが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、やむなく中止といたします。ご理解のほどお願い申し上げます。

Pick Up
Event 2021

留学生支援の会の活動に参加してみませんか？

留学生の笑顔を作る活動です。興味のある方は当会までお問い合わせください。

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-2 東京外国語大学留学生支援の会 TEL 042-330-5803 FAX 042-330-5189

<https://www.tufsissa.com>

Contents

Page 1.	1. 巻頭言	会長 谷 和明
Page 2.	2. ご挨拶	東京外国語大学留学生課長 高尾 敏文
Page 4.	3. 事業報告・会計報告	
	3-1	令和2年度事業報告
	3-2	令和2年度会計報告
Page 7.	4. 事業計画・予算	
	4-1	令和3年度事業計画
	4-2	令和3年度予算
Page 10.	5. 活動報告	
	・	コロナ禍の下での日本語広場
	・	留学生の就労支援のための緊急生活資金貸付について
Page 12.	6. 留学生の声	
Page 16.	資料	新入会員・ご寄付御礼
Page 17.	幹事会から	
		ご寄付のお願い
Page 19.	留学生支援の会会則	

FOCUS

1. 巻頭言

コロナ感染拡大2年目にあたって

留学生支援の会会長 谷 和明

会長就任後の1年は、コロナ^{パンデミック}感染拡大という未曾有の事態の中での試行錯誤の1年間でした。

4月に第1回目の緊急事態宣言が出され日本人の生活様式は一変しました。三密回避が至上命題として強調され、東外大でも全面的オンライン授業化の下で、キャンパスから学生の人影が消えました。留学生も厳しい渡航制限の中で急減し、400名近い収容力を持つ国際交流会館も閑古鳥の鳴くありさまとなりました。

支援の会の活動も大きく変化しました。感染拡大防止の観点から、会の活動拠点である連絡室を閉鎖したのをはじめ、生活支援バザー、歌舞伎鑑賞教室、国際交流の夕べなど、従来実施してきた事業のほぼすべてを中止せざるを得ませんでした。学会発表旅費補助などは学会そのものがオンライン開催となり該当者がいません

でした。

そもそも、事業を企画するための幹事会の開催すら制約される状況の下で、主にメールでの意見交換を通じながら、求められる支援活動は何か、実行可能な活動は何かの模索が続きました。そして、会の事業の重点を、家族からの経済支援やアルバイト収入の減少による生活困窮、孤立した生活下での情報不足や不安に直面している留学生の生活支援に置き、私費研究留学生に対する緊急給付金支給、大学ならびに市民大学が実施する学生フードパントリーへの寄付協力、ISEP生の2週間の自主隔離を支援するウエルカムキット配給、留学生生活調査とその回答者への生活応援券支給などの事業に取り組みました。また年度を超えましたが、留学生からの相談に応じて就労支援のための生活資金貸付も行いました。さらに、これらと並行して、留学生、会員とのオンラインによるコミュニケーションの基盤とすべく、会の公式HPを立ち上げました。

新しい事業への着手に際しては、当然、幹事会内に疑問やためらいも生じました。それを実施に向けて後押ししてくれたのは、例年になく多数の会員からの多額の寄付に込められたコロナで困っている学生のためにというあつい思いでした（これには新米会長として大いに励まされたことを申し添えます）。

コロナ感染収束の見通しが不透明ななか、今年度もまた一少なくとも前期は一、感染拡大の危険性のある事業は避け、コロナ下での生活困難に対する給付あるいは貸与事業に重点を置くこととなります。実は、4月中旬には連絡室を再開し、日本語広場を開催したのですが、3度目の緊急事態宣言で、残念ながら早々と中断せざるを得ませんでした。ワクチン接種の進展により、後期には従来実施してきた文化、交流活動が再開できることを願うのみです。

とはいえ、コロナ感染が終息したからと言って、すべてがコロナ前に戻るわけではないでし

よう。例えば、コロナの経済的打撃は現在ますます広がっており、その影響は数年間続くともいわれます。それゆえ、留学生の生活困窮への支援という課題は終息後も当分続くかもしれません。アフターコロナ、ポストコロナなどと言われますが、留学生支援活動のありかたもまた、コロナ禍による留学制度の変化、留学生の生活の変化、さらにはコロナ禍を通じて私たちが得た経験などに応じて、変化を迫られるかもしれません。

感染拡大2年目の今年度は、コロナ禍の下で昨年度実施した事業を継続、発展させつつ、ポストコロナの支援のあり方を考えていくことになると思います。そのためにも、会員の皆様からのこれまで以上のご意見、ご協力をお願いする次第です。

2. ご挨拶

「ダイバーシティー&インクルージョン」

東京外国語大学 留学生課長
高尾敏史

新型コロナウイルスの感染拡大によりさまざまな面で生活にも変化が余儀なくされるようになっていますが、このような生活が1年以上も続くと、もはや日常の生活となっていることもあるのではないのでしょうか。

留学生交流においても、国・地域を越える物理的な移動が制限され、居ながらにして留学先の授業を受講するいわゆる「オンライン留学」が実態となるなど、留学という概念が大きく変化していくことが予想され、留学生支援のあり方も大きく変わっていくことが予想されます。

コロナ禍でDX（デジタルトランスフォーメーション）という言葉も聞かれるようになりましたが、直接的な情報技術の進展に起因する変

化だけではなく、その影響はあたりまえの私たちの生活の場面でも変革が必要になってきていることもあるのではないかと思います。

「留学生支援の会」が設立された 1999 年は東京外国語大学にとっても、留学生にとっても大きな岐路となった年です。「国立大学法人化（2004 年）」の方向性が閣議決定された年でもありますし、「日本留学試験（EJU）（2001 年から試行試験実施）」の開発の契機となる協力者会議の検討が開始された年でもあります。

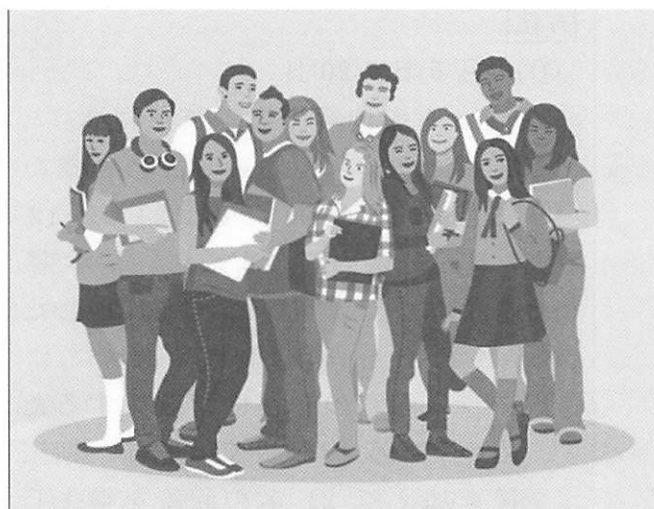
私自身も当時、日本留学試験の国外試験実施のための調査（2000 年に調査団に参加し、留学生担当部署への配属は 2001 年から）に関わったことが契機で留学生関係の仕事に携わることとなり、以来、5 大学 11 年間は留学生に直接関わる部署でお世話になりました。

振り返ってみると、さまざまな大学・機関での経験は、新しい気づきをいただける機会でもあります。こと留学生やさまざまな海外の大学関係者との交流を含む仕事は、相互理解に苦労する場面も多くありますが、時には想像もしていなかったアイデアを生むことがあります。まさにトランスフォーメーションの連続だったような気がします。

異文化交流という場面でもそうですが、今年の 3 月までは、女子大学（お茶の水女子大学）でお世話になっていたこともあり、ジェンダーギャップや LGBT の問題についても考えることが多くありました。世界経済フォーラム（WEF）の「ジェンダーギャップ指数 2021」では、日本は調査対象となった世界 156 カ国の 120 位ということで、必ずしも女性が暮らしやすい国とはいえない実態の中、いかに女性リーダーを育成するのが女子大学のミッションとなっていたわけですが、これは単純に労働力人口の減少や女性の地位向上ということだけではなく、政治、経済、社会あらゆる面での国益を損なっているということを前提にこれからの女子大学がどのような役割を担うべきなのかという問題意識が必要だと学びました。

最近では「SDGs（持続可能な開発目標）」のように地球規模の課題が私たちの身近な問題として認識されるようになってきたように思います。

4 月から東京外国語大学にお世話になることとなりましたが、「多文化共生に寄与する東京外国語大学」ということで、東京外国語大学のミッションに向けてさまざまな大学、留学生を取り巻く皆様をつなぐ仕事ができればと思っています。地球規模の課題が身近なこととして認識されるようになってきたからこそ、多くの人々が共通の課題として関心を寄せることとなり、それぞれが共生できる空間を作っていく必要がより増しているのだと思います。既知の経験を生かすことも大切ですが、既成概念にとらわれない発想や柔軟性を意識し、さらにはコロナ禍という変化のタイミングで、東京外国語大学がさらに輝く大学としての一助となるための貢献ができればと思っています。



3. 事業報告・会計報告

3-1 令和2年度事業報告

A. 生活支援事業

1. 給付事業

(1) 新型コロナウイルス感染下での留学生の学び継続を支援する緊急給付金

支給対象者 私費研究留学生 12名、

給付金金額 10万円、総支給額 120万円

支給方法

①7月1日：事業の公示、「呼びかけ」

「申請書」の配布

②7月15日：申請受付締め切り

(申請者 20名)

③7月20日～27日：選考委員会による支給者 12名の決定

④7月28日～31日：支給者 12名の口座への給付金振り込み

*上記はすべてオンラインで実施

(2) 新規 ISEP 学生の自主隔離期間の生活を支援するウェルカムキット配布

配布者 59名

ウェルカムキット内容 (基本食器類、マスク、タオル、即席めん、粉末スープ、パン)

方法

①11月5日～20日：

キットの内容の決定及び調達

②11月22日：キットの袋詰め作業

③11月23日：配布 11月24日～12月3日の分散入寮の事前に、留学生課に依頼して各室内に配置しました。

④3月11日～15日間：事後調査

キット内容の有益性を確認するためのアンケート調査を実施。期限後を加えて 21名の回答を得ましたが、全員が有益であり、今後来

日する学生にも実施した方が良いとの評価でした。

(3) 「コロナ禍の下での留学生の生活調査」と回答者への生協商品券配布

1) 生活調査

対象者 令和2年5月以前から在籍している留学生全員

回答者 63名

方法

①メールによる質問票の配布と回収(令和2年12月23日～令和3年1月6日)

②回答の集計と分析を行い、会報66号で公表(令和3年3月)

2) 「コロナに負けるな!生活応援」券配布

配布者 55名(調査回答者63名中、受領辞退者3名、不受領者5名)

配布内容 東外大生協購買部、食堂で利用できる商品券3000円分

方法

①令和3年1月6日：回答者に配布方法、日時の再確認

②令和3年1月13, 14, 19日：連絡室にて応援券を手渡し

③1月19日～2月：来室しなかった学生のうち、受領希望者に郵送

(4) 生活用品などを廉価で提供するバザー

例年春期、秋期、外語祭に実施してきましたが、コロナ感染防止のため中止しました。

(5) 学会発表旅費の助成金を支給

交通費補助対象となる学会への参加がなかったため、支給はありませんでした。

2. 他団体の実施する留学支援事業への寄付

(1) 東京外国語大学が4回実施した学生対象のフードパントリー事業への寄付

令和2年7月10日 大学の「修学支援基金」に10万円を寄付

(2) フードバンク府中 府中市内の学生に対するフードパントリー事業への寄付

①フードパントリーに関する学習会講師謝礼 1万円(令和2年12月20日)

②フードパントリーによる東外大留学生生活支援活動への協力寄付 10万円(令和2年12月22日)

3. 相談事業

連絡室を閉鎖したため相談事業はほとんど行えませんでした。

B. 友好親善事業

実施できませんでした。

C. 日本理解事業

例年通りには実施できませんでした。日本語広場については、10ページの活動報告をご覧ください。

D. 国際理解事業

実施できませんでした。

E. 広報その他の事業

1. 「会報」を3回発行

第64号(令和2年7月) 第65号(同11月) 第66号(令和3年3月)

2. 会ホームページの開設

コロナ禍の下、オンラインによるコミュニケーションが重要となっていることに鑑み、会の公式HPを再開設しま

した。

3. 幹事会の開催

幹事会を開催して行事の企画・運営等を相談しました

令和2年4月25日(メール会議)、5月30日(メール会議)、6月21日(Zoom会議)、7月19日、9月27日、11月22日、12月20日、令和3年2月28日

4. 会則・人事

長年幹事として貢献されてきた中村皓一会員、竹内朋子会員が退任されました。

大谷達之会員、河野貴光会員、山根博彦会員、米山智榮子会員の幹事就任が7月幹事会で承認されました。



フードパントリー (フードバンク府中)

3-2 令和2年度会計報告

令和2年度（令和2年3月～令和3年3月）一般会計収支決算

留学生支援の会 令和2年度一般会計収支決算 令和2年4月1日～令和3年3月31日

《収入の部》

科目	項目	2年度予算額	2年度決算額	摘要
前年度繰越金		5,637,469	5,637,469	
会費	一般会員	1,569,000	1,746,000	3,000円×156名 6,000円×1名 12,000円×109名
	協賛会員	20,000	20,000	20,000円×1名
寄付	一般	200,000	1,156,000	
その他	バザー等	0	2,000	バザー収益・行事参加費
	利息	10	4	受取利息
収入の部合計(A)		7,426,479	8,581,479	

《支出の部》

科目	項目	2年度予算額	2年度決算額	摘要
活動費 (友好親善事業・ 相互理解事業)	国際交流行事共催費	360,000	0	伝統文化体験費・交流会費(大学との共催)
	史跡見学費	120,000	0	鎌倉見学
	日本文化見学費	190,000	0	歌舞伎見学・東京下町ツアー・ふじの国ツアー
	日本先端技術見学費	150,000	0	先端技術工場見学
	日本文化体験費	70,000	0	華道・書道・茶道・日本語広場
	日本人学生との交流会	0	0	茶・菓子・屋敷等
	その他の交流活動費	0	0	国際理解教育交通費・謝金
活動費 (生活支援事業)	緊急生活支援金	1,000,000	1,200,000	緊急給付金 10万円×12名
	教育研究支援金	150,000	0	国際学会発表出席旅費補助金
	連絡室協力謝金	150,000	11,500	留学生連絡室協力謝金(秋学期のみ)
	生活支援金(寄付)	0	210,000	大学10万円 府中フードバンク11万円
	生活支援金(商品券)	0	165,000	アンケート謝礼商品券 3,000円×55名
	生活支援金品	0	156,109	ISEPウェルカムキット 60名
活動費 (広報普及事業)	通信費	270,000	182,659	会報発送費等(84号 85号)
	印刷費	230,000	151,421	会報印刷費等(84号 85号)
	活動費小計(a)	2,690,000	2,076,689	
運営費	消耗品費	30,000	16,500	プリンターインク代・コピー用紙代
	備品費	20,000	17,050	
	連絡室運営費	10,000	0	
	郵便振替手数料	50,000	50,497	
	その他	30,000	9,900	ホームページ運営費
	運営費小計(b)	140,000	93,947	
支出の部の合計(B)	(a)+(b)	2,830,000	2,170,636	
次年度繰越金	(A)-(B)	4,596,479	6,390,837	

上記の通り、相違ございません。

令和3年5月27日

監事 川口健一 (印)

4. 事業計画・予算

4-1 令和3年度事業計画

新型コロナウイルスの感染拡大収束の見通しが依然不確実な状況であることを踏まえ、本年度の事業計画を以下のような原則で策定します。

- (1) 今年度も、コロナ感染下での留学生の生活困窮、留学継続の困難に対応した支援策を実施します。
- (2) 留学生等との接触を伴う事業に関しては、前期は実施せず、後期については感染収束状況に応じて検討し、可能であれば企画、実施します。
- (3) 状況の変化に対応して必要な変更、補足を行います。そのため予備費を計上するとともに、会員の皆様からお預かりしている会費を有効に活用できるよう、予算項目の組み換えを柔軟に行います。

A. 生活支援事業

1. 給付事業

- (1) 新型コロナウイルス感染下での留学生の学び継続を支援する緊急給付金
給付金 10 万円を、私費研究留学生 10 名を限度に支給する（予算 100 万円）
実施時期：令和 3 年度 6 月～
- (2) 入寮後の自主隔離期間の生活支援品配布
新規入寮者の人数、実態に応じて可能な支援を行う（予算 15 万円）
実施時期：新規入寮者が確定した時期に実施
- (3) 緊急生活資金貸付
留学生の生活資金不足に柔軟に対応できる無利子の短期資金貸し付けをおこなう
今年度は 30 万円の枠内で実施（予備費を活用）

*詳しくは 12 ページをご覧ください。

- (4) 困窮が想定される留学生に対する聞き取り調査に基づく生活支援
昨年度「生活調査」で生活困難と回答した学生を対象とする。
- (5) 生活用品のバザー
前期は実施しない。
- (6) 学会出席旅費の助成金
合計 15 万円を国内外学会参加者に支給する。

2. 相談事業

支援の会 HP の活用など、相談アクセスの仕組みを拡充する。

B. 友好親善事業

1. 国際交流事業

「国際交流の夕べ」:感染状況が改善されれば、12 月に実施する。

2. 会員等の協力による友好親善事業
感染状況が改善されれば、ふじのくに留学生ツアー、地域の文化的行事などについて、後期に企画・実施する。

C. 日本理解事業

1. 伝統文化の見学

後期に可能な状況となれば事業を企画・実施する。

2. 伝統文化の体験

1) 「伝統文化体験教室」

「国際交流の夕べ」が実施可能であれば、あわせて実施する。

2) 日本語広場の開催

連絡室を開室できれば、希望に応じて開催するが、緊急事態宣言期間中は中止する（予算 5 万円）。

3. 日本の「今」を知る

後期に可能な状況となれば、工場見学等の事業を企画・実施する。

D. 国際理解事業

感染状況等を考慮しつつ、後期に可能となれば事業を企画・実施する。

E. 広報その他の事業

1. 「支援の会 会報誌」を年 3 回刊行（第 67～69 号）

2. ホームページ、Facebook による広報の拡充と活用をはかる（予算 3 万円）。

3. 会員拡大および財政基盤改善のための諸活動を進める

4. コロナ感染拡大下での留学生生活の実情に関する情報収集を進める

例) 留学生への依頼原稿に 3000 円の謝礼を支払う。

5. 幹事会の開催（原則毎月）

会の事業、運営の基本となる事業報告、会計決算、事業計画、会計予算に関する、みなさまのご意見、ご感想、ご提案等を積極的にお寄せください。

今号には、昨年度の事業報告、会計決算ならびに本年度の事業計画、会計予算を掲載しています。これらは、会の事業、運営の基本となる文書であり、会員から寄せられた会費や寄付が何のためにどのように使われたのか、使われるのかを、会員全員で確認するための文書です。

これらの文書は、本来ならば、全会員による総会で報告され、承認・採択されるものです。けれども、全国に分散した会員が集合することが困難であるという実情を踏まえ、本会では、総会開催の代替措置として、年度ごとの事業、会計に関わる基本文書を年度最初の会報に掲載してまいりました。

したがって、事業報告等の文書は、単に決定事項の事後報告ではなく、会員のみなさまに内容を検討いただき、承認を得るための文書としてお届けするものです。この趣旨をご理解の上、掲載文書をお読みにになり、忌憚ないご意見、ご批判、ご提案をお寄せいただくよう、お願いいたします。それこそが、本会の活動の源泉となるものです。

（連絡室を閉鎖中ですので、ご意見等は、会へのメールあるいは会の HP の「連絡フォーム」を利用してお寄せください）



4-2 令和3年度予算

令和3年度（令和3年4月～令和4年3月）一般会計予算

東京外国語大学留学生支援の会 令和3年度一般会計予算

《収入の部》

科目	項目	3年度予算額	摘要
前年度繰越金		6,390,837	
会費	一般会員	1,728,000	3,000円×132名 12,000円×111名
	協賛会員	20,000	20,000円×1名
寄付	一般	200,000	
その他	バザー等	-	バザー収益・行事参加費
	利息	5	受取利息
収入の部合計(A)		8,338,842	

《支出の部》

科目	項目	3年度予算額	摘要
活動費 (友好親善事業・ 相互理解事業)	国際交流行事共催費	-	伝統文化体験費・交流会費(大学との共催)
	史跡見学費	-	鎌倉見学
	日本文化見学費	200,000	川越ツアー・ふじの国ツアー
	日本先端技術見学費	100,000	先端技術工場見学
	日本文化体験費	50,000	華道・書道・茶道・日本語広場
	各国文化紹介費	-	茶・菓子・昼食等
	その他の交流活動費	-	国際理解教育交通費・謝金
活動費 (生活支援事業)	緊急生活支援金	1,000,000	留学生の学び継続を支援する緊急給付金(10万円×10名)
	教育研究支援金	150,000	学会出席旅費
	連絡室協力謝金	50,000	留学生連絡室協力謝金
	特別生活支援金	500,000	生活調査「困難」回答者への支援
	会報原稿謝礼金	30,000	3000円×10名
活動費 (広報普及事業)	通信費	350,000	会報発送費等
	印刷費	300,000	会報印刷費等
活動費(予備費)		450,000	
	活動費小計(a)	3,180,000	
運営費	消耗品費	30,000	プリンターインク代・コピー用紙代
	備品費	20,000	
	連絡室運営費	10,000	
	郵便振替手数料	50,000	
	その他	20,000	ホームページ運営費
	運営費小計(b)	130,000	
支出の部の合計(B)	(a)+(b)	3,310,000	
次年度繰越金	(A)-(B)	5,028,842	

* 次年度繰越分には、会費の前受分（4年分をお支払いいただいた方の分）が含まれています。

5. 活動報告

コロナ禍の下での日本語広場

(令和2年度の状況及び令和3年度に向けて)

日本語広場は、学ぶ機会のない留学生あるいは外国人教員の家族に日本語学習の場を作りたいとの思いから、15年ほど前に連絡室活動の一環として始まりました。教員自身が参加することもあります。クラスの多くは講師一人に学習者一人か二人という少人数形式で行われています。深い専門知識と経験を持つ講師の方々がボランティアで協力してくれることにより継続されてきた活動です。近年は、本会の田中相談役が関わるNPO国際社会貢献センターのご協力で講師の派遣を受けています。

昨年度はコロナ感染防止のために連絡室を閉鎖したため、日本語広場の新規募集も行えませんでした。そんな中で、関講師が1名の学習者にオンラインで継続してくれました。関講師はその様子を以下のように語ってくれました。

「私の学習者は、外国人教員の配偶者です。コロナ禍で大学への立入禁止となった昨年4月より対面からオンラインに切り替えました。学習者からの希望に押されてスタートしたオンラインクラスでしたが、試行錯誤するうちに徐々に慣れてきて、自分で作成した資料や教材などを画面共有しながら、勉強を進めています。学習者は意欲的で、今夏日本語能力試験にも挑戦、私も目標達成に力が入っています。また、日本語指導とともに、文化の紹介をしたり意見交換をしたりなど、毎週顔を合わせて交流できることは、講師・学習者双方にとって、有意義な時間を共有していると実感しています。」

また今年度は、4月からの連絡室再開に伴い、新たなクラスの開催に取り組みました。昨年秋に来日して家族で寮に住む留学生から小学校に通う3人の子供に日本語教育を受けさせたいとの依頼を受けましたが、すぐには始められませんでした。3月頃であればと北村講師が引き受けて下さり、学習者側の了解を得て待っていただきました。その頃には感染状態も落ち着くのではと考え、特段の心配もしていませんでした。しかし約束の時期が近づいても一向に感染状態は良くなりません。感染リスクを考えると対面でのクラスには二の足を踏む思いでしたが、北村講師も承知して下さり、スタートは4月と予定を立てました。状況が状況なので、改めて会長に大学側に使用場所の許可を打診していただき、許可を得ました。感染対策としては、幸い寮の入り口に検温器が設置されていますので、それを利用してクラス前に全員の検温を講師にお願いし、また手の消毒、机の拭き取り等、今まで必要のなかったことにも気を使っていたいています。

初めは緊張で硬くなっていた様子の学習者でしたが、一度、二度とクラスが進む内、笑顔が見えるようになりました。しかし恐れていた緊急事態宣言に、現在は止む無く中断しております。感染予防対策にと購入したアクリル板も利用の無い状態です。

北村講師はこの状況下でクラスを続けるお気持ち、以下のように語っていらっしゃいます。

「子供達にとっての日本滞在期間中の印象が全てコロナ禍のみに染まってしまうような、楽しい勉強の時間を少しでも作ってあげたいと思っています。」

ワクチン接種の普及により、この3名の快活な児童たちの日本語学習の場を一日も早く再開できるよう願っています。

コロナ禍の下、活動が大幅に制限されている私達支援の会ですが、お二人の講師の献身

的な協力や国際社会貢献センターのご支援に改めて感謝するとともに、日本語広場の継続のためにできる限りのことをしていきたいと思えます。

(担当幹事 小平 京子)

留学生の就労支援のための 緊急生活資金貸付について

今回、卒業予定の留学生からの切実な相談を受け、急きょ緊急生活資金の貸付を行いました。詳しい経緯は以下のとおりです。

内定は得たが就労ビザが出るまで働けない。無収入期間の生活資金を貸してもらえないか。博士前期課程を修了する留学生 A からそんな相談メールが届いたのは、卒業式前日でした。窮状はわかるが会としての対応は難しいだろう。それが率直な感想でした。というのも、苦学生への緊急貸付は当会の目玉事業でしたが、様々な事情により3年前に廃止されていたからです。にもかかわらず即刻電話して翌日面談したのは、これが、開設早々のホームページの「問い合わせ」機能による相談第1号だったからです。可能な限り丁寧に対応しなければ、という思いがありました。

コロナ下とはいえ、卒業式当日のキャンパスは着飾った学生たちで溢れ、華やいだ雰囲気にも包まれていました。式後、連絡室に現れた A もドレスアップして証書入りの円筒と花束を持っていましたが、表情には心労が現れ、元気ありません。でも、当方の質問に対し、状況を語ってくれました。

文科省の奨学金を受給する国費留学生として、東外大の大学院で2年間勉学に専念でき、教育学に関する修論も提出して無事修了する。日本での就職を目指しているが、コロナ下で思うように進まず、3月中旬によくある IT 企業から内定を得た。同社は就労ビザが発給され次第

採用する方針である。が、就労ビザ発給には数カ月要することもあり、その間はアルバイトも不可なので無収入となる。それに備える貯金はないし、家族からの援助の見込みもない。さらに、専門分野の問題で就労ビザが発給されない可能性もある。そのリスクを回避するためにはとりあえず特定活動ビザを取得して、アルバイトをするという道もあるとアドバイスされた。どうすればよいのか・・・。

A の中では、無収入となる4月以降をどう乗り切るかという問題と就労ビザと特定活動ビザのどちらが現実的かという問題が一体となり、出口を見いだせない状態でした。そこで、2つを切り離して考えるよう勧めるとともに、後者に関してはあくまでも就労ビザが正攻法であることを助言し、早急に入管窓口で具体的に相談するように言いました。また生活費に関しては、知人からの借用など可能な努力をし、そのうえで不足額を算定するよう伝えました。

その後幾度かやり取りがあり、4月中旬には、内定企業の合意も得て就労ビザ申請を行った、だが順調に処理されても初月給は6月以降となる、その間の不足額約14万の貸し付けを相談したい旨のメールがあり、連絡室で面談して、会として検討すると約束しました。

直後に開催された幹事会では、このような事態に対応できる貸付の仕組みの策定が合意されましたが、Aへの貸付けは見送られました。けれども、Aの指導教官でもあった当会副会長から、Aの人物を保証し、貸付金返済についても責任をもって指導する趣旨の訴えがなされて事態は急転し、特例として10万を貸付けることになり、5月の連休明けに実行されました。5月中旬にはAから就労ビザが発給され、6月1日から勤務できるという嬉しい知らせがありました。

以上、就職内定に伴う生活資金貸付相談という、前例のない事例に戸惑いながらも、就労ビザや特定活動ビザの仕組みについて調べながら、留学生Aの就労活動を激励し、支援する活動を

模索した1カ月余の経過報告です。

今回の問題の要点は、外国人留学生の就労を困難にしている入管制度上の規制にあります。問題の発端は、就職内定が遅れたことにありますが、仮に日本人学生だったなら今回のような事態は生じなかったでしょう。内定が決まったことを喜び、即座に必要な書類を揃え、4月から勤務開始も可能だったかもしれません。どんな職業に就こうと自由です。たとえ採用まで待機期間があっても、アルバイトでしのぐことも簡単です。

だが、留学生にはそれが違法行為となります。就労ビザなしには雇用は不可です。ビザ取得には相当期間の審査を要します。留学生の場合「技術・人文知識・国際業務」での在留ビザとなりますが、その場合、大学等の専攻と雇用職種の専門性の一致が原則とされます。IT職種の場合、理数系なら問題ないでしょうが、外語大のような文系の場合には不一致と判定される可能性があります。Aが内定後1か月近く就労ビザ申請を逡巡したのも、そのためです。また、卒業と同時に留学ビザが失効するので、アルバイトは違法です。

内定のわずかな遅れが、留学生にとっては深刻な生活難に直結する場合があることを、私たちは、今回の事案を通じて学びました。留学生の国内での就労の促進が留学生政策の重要課題として叫ばれるなか、今後も留学生特有の困難を軽減するために、支援の会らしい柔軟な支援を工夫していきたいと思えます。

(会長 谷和明)

留学生支援の会では、令和3年度も留学生からの緊急の相談に対し柔軟に対応していきたいと考えています。

6. 留学生の声

コロナ禍の厳しい状況の中でも、前向きに努力を重ねている留学生の皆さんがいます。彼らの声を聴き、少しでも力になれることがこの支援の会の喜びでもあります。今回、2人の留学生の方が寄稿してくれましたのでご紹介します。

コロナ禍の「いま」を生きる

—日本での留学生活—

陳阿敏

(ISEP・内モンゴル大学交換留学生：中国)

*写真もご本人提供のものです。

去年の11月に日本に来た私の半年の経歴を回想すれば、不思議な気持ちでいっぱいである。内モンゴル大学から東京外国語大学に交換留学できる学生は3人いるが、他の2人は中国で12月に日本語能力試験を受けるため来られなかった。中国の他の大学の交換留学生たちもいろいろな事情で来日できなくなり、オンラインで受講している。私一人だけ来日できたのは、非常に幸運だった。

私は小さい時から日本のアニメが好きで、両親も日本語を勉強するように励ましてくれた。大学で日本語科に入った時から、日本に来て勉強できることを楽しみにしていた。東外大は私にとって魔法のような魅力があり、世界のトップの外国語大学だと思われる。昨年、全世界で新型コロナウイルスが流行しているにもかかわらず、私はためらうことなくここに来ることを選んだ。飛行機を降りた後、学校が用意してくれたタクシーが私と私の仲間を迎えに来た。寮に連れて行かれた後、寮の管理人が熱心に部屋の設備を紹介してくれた。一人用の寮と料理・入浴施設には非常に感動した。国から定められた2週間の隔離期間中、留学生支援の会のウエルカムキットや留学生課による食べ物の提供など、サポートの充実に驚いた。

二週間の間、私は日々日本語を勉強し、論文

を読み、日本のテレビドラマを見た。時間は自
ずと、あっという間に過ぎていった。

私の興味は日本文学と教育学である。今年は
様々な教育学コースを選び、私の理解が不十分
なところはいつも、先生や学生達と積極的にコ
ミュニケーションをとることを心がけた。日本
語のレベルが上がり、日本人の友人もできるよ
うになった。図書館には設備が整っており、幅
広い本やオリジナルの本がたくさんあり、卒業
論文に大いに役立っている。やがて新学期が始
まり、桜も咲き始めた。新学期は対面授業を受
け、ほとんどの授業でプレゼンテーションが必
要で、資料収集から自分なりの論点を提示する
まで、私は多くの学生と同じように昼夜を問わ
ず図書館で資料を読んだ。

その経験があったからこそ、教授たちの学問
と研究を愛する精神に敬服している。東外大で、
厳密な姿勢で学問に臨むことの大切さや、勉強
することはただ単なる学位の獲得だけではなく、
真理を追究することであると分かるようになった。
私にとって非常に貴重な経験である。また、
専攻の違う日本人の友達にも出会った。彼らは
日本語が上手ではない私ととても喜んでコミュ
ニケーションを取り、そのおかげで日本をより
よく知ることができた。

想像していた日本の生活が現実になった。池
袋、新宿、渋谷、上野、このような名前は留学
する前の私にとって、ただの地名に過ぎなかつ
た。しかし、東京に来てから、ただの地名では
なく、大切な思い出として記憶に留まるであろ
う。

日本人は独特な優しさがある。バスは乗客が
きちんと座ってから動き出す。電車には冬にな
ると座席にも暖房が入る。トイレには、予備の
トイレットペーパーがいつも置いてある。赤ちゃ
ん連れのお母さんのために、オムツ替えのシー
トもある。そういう細部に至るまで人のために
考えているところが日本特有の優しさだと思
う。日本のサービス業界の「顧客第一」の考えもす
ばらしい。店員さんの笑顔がいつも素敵だ。も

し日本に来なければ、私は永遠にこれらのこと
を知らない。

人生の「初めて」をたくさん日本で経験した。
初めての野球体験、カーリング、スキークラス、
ボーリング、パークゴルフ、太鼓体験、盆踊り
…初めて自分でやりたいことを決め、行動に移
した。

交換留学生は、それぞれの文化の違いを交流
するために一緒に食事をすることがある。私は
英国やブラジルからの交換留学生と一緒にディ
ズニーシー、鎌倉、秋葉原にも行った。江の島
で30分ほどの温泉を体験した。値段はとても安
くて一人1,000円だった。また、秋葉原でたく
さんのフィギュアを見ながら、見たアニメの中
のキャラクターを次々と思い出した。兄は「鬼
滅の刃」というアニメが好きなので、「鬼滅の
刃」のフィギュアをプレゼントとして購入した。
それに、鎌倉で電車に乗って海を見た。その時
にサーフィンをする人もたくさんいた。内モン
ゴルは海のない内陸部なので、海のあるところ
に住む人はラッキーだと思う。

日本での留学生活が人生を学ぶことのように
感じて、これまでの24年間で体験したことがな
い物事にどんどん挑戦した。吉祥寺で初めてお
寿司を食べたときは、箸を使ってお寿司を取っ
た。だが失敗してご飯がバラバラになってお皿
に落ちた。数分の努力を経て、ようやく箸でお
寿司を挟んで少しずつ食べられるようになった。
だが、たくさんの米粒がテーブルに落ちた。日
本人の友達が手でお寿司を握って一口で食べる
ことを見た。最初に友たちがきつとお腹が空い
たからだと思っていた。後に、一口で食べるの
がマナーだとやっと気づいた。

アルバイトもその一環だ。最初は口を開けて
日本語を話す勇気がなかった。時間が経ってか
ら、ゆっくりと店長と交流し始めて、たまに間
違えると、店長さんが辛抱強く次回はどうか
教えてくれる。中国では、学生は勉強
だけでとても忙しく、授業料と生活費は両親か
らもらえるので、外でアルバイトをする学生は

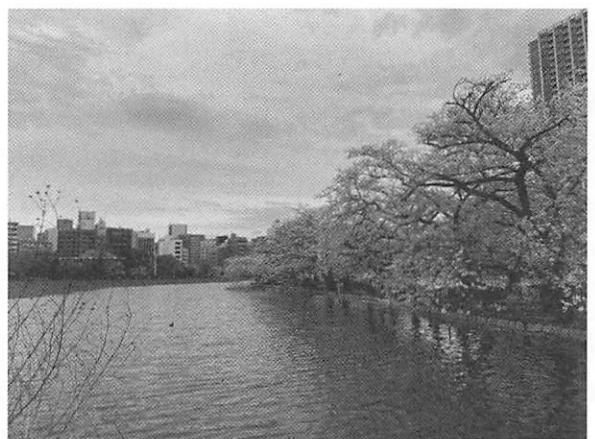
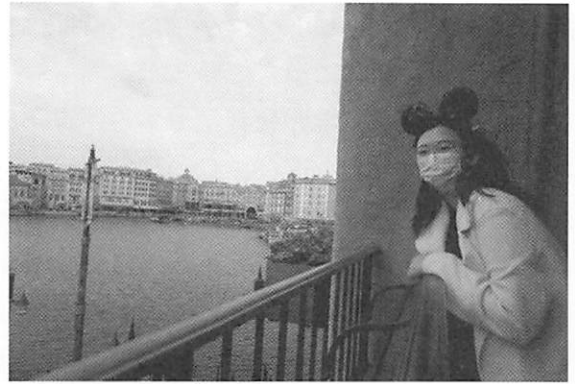
ほとんどいない。また、時間給労働者を雇う場所も少ない。帰国後はアルバイトをしないだろう。だから、日本のほとんどの学生が自立するためにアルバイトをしていることを知ったとき、私は驚いた。それで、私は一人で働き始めた。外で働くと自然に自立心が生じてくると思う。日本でのアルバイトの体験は、留学の大切な思い出の一つでもある。

留学生活はもうそろそろ終止符を打つところだが、東外大の留学生活は始まりであり、学問の道のはじめは終わりではない。この半年の留学は、私の物事に対する思考、生活態度や将来の生き方などのあらゆる方面において多大な影響を与える貴重な体験となった。忙しい生活の中でも、絶えず自分の知識と能力を高めて、今後も自由に日本語で交流することができようになりたい。この1年間にいろいろお世話になった日本の先生たち、留学生たち、そして日本でできた友人らに感謝するとともに、日本での学び、貴重な思い出を忘れずに、帰国後も文学や教育学を勉強し続けたいと思う。コロナ禍で閉店に追い込まれる日本橋の居酒屋。夜の八時になると人がいなくなる街中。次に日本を訪れるときには、マスクを外した日本人の笑顔や活気を取り戻した日本の街を目にすることができることを願いながら、日本での留学生生活を一旦締めくくる。

(注:陳さんは大学院修士課程2年目の学生で、今回の日本留学後1年かけて論文を仕上げ、修了する予定です)。



陳阿敏さん



学生支援センターと私

ダニバエワ マリヤム

(大学院博士後期課程 2年:カザフスタン)

*写真もご本人提供のものです。

私はダニバエワ マリヤムです。カザフスタンの前の首都アルマティ出身です。2013年にアル・ファラビカザフ国立大学東洋学部日本語学専攻に入学しました。学部4年生の時日本に1年間留学することができました。東京外国語大学で日本語・日本文化研修留学生として留学しました。日本に来るまでに日本語を専門科目として勉強し、日本人の留学生とよく話したり、日本の生活について聞いていたりしていたので、日本に来てカルチャーショックを感じませんでした。全ての授業を日本語で勉強し、毎日練習もしていたので、日本語のレベルがもっと上がっていきました。全世界の国々からの留学生が多数いらっしやいまして、多くの友達と知り合いを作ることができました。旅行と遊びによく行って、日本文化に関する知識を深めることができました。はじめての留学は貴重な体験になりました。1年間の充実した留学期間を終え、カザフスタンに帰りました。帰国後学部を卒業して、また日本に留学することを決心しました。

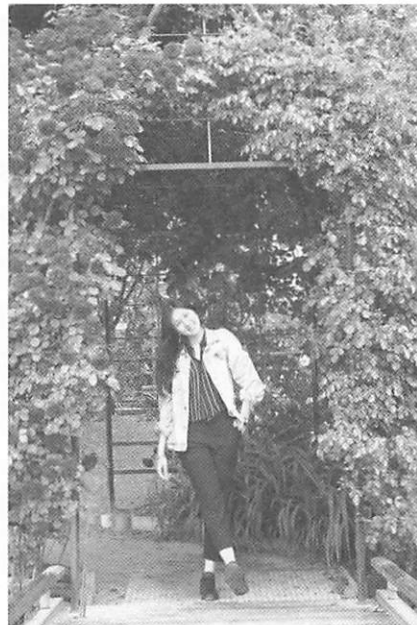
2018年にまた同じく東京外国語大学に研究生として留学することができました。2020年に東京外国語大学大学院に入学し、現在修士2年です。

大学院で教育学を専攻し、カザフスタンのインクルーシブ教育制度の課題について研究しています。まだしばらく日本で生活を進めていきたいので、進学や就活を予定しています。

大学が行った鎌倉への旅行に行った時学生支援センターについてはじめて聞きました。しかし、学生のためにバザールと旅行以外やっている支援について知りませんでした。それを知っていれば、困っていた時にすぐにそのセンターの担当者に相談し、もっとうまくできたかなと思います。大学で学生支援センターについて

詳しい情報があまり広がっていないため、多くの学生がそのような支援があることを知らないと思います。できるだけ、そのような大切な情報をもっと共有してほしいです。

(注 文中「学生支援センター」とあるのは本会のことです。本会についての情報が広まっていないことを案じている本人自身が名称を間違えているのは皮肉なことですが、現実を肝に銘ずるために、そのまま掲載しました。)



ダニバエワ マリヤムさん

【資料】今年度の東外大留学生の数と特徴

今年5月1日現在、東外大に在籍する外国人留学生は591名で、昨年よりさらに減少し、コロナ前の3/4弱となりました。ここには、渡航できず、自国でオンライン受講している学生もかなり含まれるので、実際に「留学」している学生数は500名を切るでしょう。

最も減少したのは研究留学生で、昨年の半数以下となりました。とはいえ、これはコロナの影響というよりも入学選抜制度改定の結果だそうです。

コロナの影響が顕著なのは交換留学生（ISEP生）で、121名と、昨年に引き続きコロナ前の半数近くまで減少しています。しかもそのうちの半分以上、つまり今年4月来日する予定だった学生は、すべて自国でのOnline授業です。これらの学生が夏休み前に来日できる可能性は極めて少ないといえます。

以上のような状況下で、国際交流会館に入居する留学生も少なく、6月中旬段階で、1号館25名、2号館8名、3号館31名となっています。

2021年度東京外国語大学留学生数（5月1日現在）

所属	総数	課程別内訳		国費・私費内訳		参考	
		学部	大学院	国費	私費	2020年度	2019年度
正規生	420	183	237	117	303	426	432
研究生	37	29	8	12	25	87	116
交換留学生	121	92	29	0	121	129	217
その他	13	13	0	13	0	25	31
計	591	317	274	142	449	667	796

東京外国語大学公表統計に基づき作成

ご入会・ご寄付、ありがとうございます

新規加入者

■一般会員(敬称略)

(令和3年3月15日～令和3年6月30日)

阿部清隆	阿部嘉彦	新井奏斗
飯島志人	池邊くる桃	石崎晃一
磯村義人	市田夏実	伊豫田倫朗
上井陽人	梅田昌代	浦田日和
江川莉奈	笈川大輝	大塚桜子
岡本伊織	沖田達孝	小田航士
織田裕子	小野田雄	小野田紀子
甲斐マキ恵	笠井まや	笠原隆成
加藤優介	加藤稚菜	上嶋理尋
キーン花	喜多野元	吉楽直
木村真巳子	久木田奈津子	窪井素子
黒田龍之介	神崎蔵人	五島葉
小幡憲治	小林直也	駒木ことみ
小松佳祐	小宮直道	今野尚美
齋木豊	斉藤百子	酒井暁
		酒井里緒
坂口奈津代	佐々木美聡	佐々木洋子
島村雅子	下地美穂	彰梨紗子
白木宏和	鈴木詩織	鈴木理花
須藤杏翔	住田達彦	関塚俊文
関典子	園田凜子	高橋慶朗
高橋雄之	高村明宏	竹下百香
竹野谷智一	田中詩桜	田中真欧
塚本恵子	筒井南実	中井生純
中川隼三郎	中島大智	中西七海
中間亨佳	中村久美	中村勇平
難波舞香	新美陽子	西岡功
西島晴之	西村真結子	新田衣未莉
野村美名	橋本駿太郎	長谷川優
畑石康治	平井昌之	平川大朗
廣尾和季	廣利明子	深谷芽生
福島明	福田妃那	福間英進
藤井裕子	藤本顕也	細川明日美
堀江龍之介	前田信明	牧野楓

楨野隆幸 松岡耕二 松下秀光
三浦友生太 水野笑 蓑輪圭史郎
向井眞理 村井為敦 村上夕奈
毛利遼 森賀あすか 森田英美花
森田潤 山口朋奈 山下訓正
山田泰輝 山本順三 吉田武之輔
吉田最音 依田直也

幹事会から

1) 「会員番号(会員 ID)の発行について」
会報65号でもお知らせいたしましたが、会員の皆様に会員番号(会員 ID)を発行していません。会報発送の際に宛名の下に会員番号を記載しておりますので、ご確認ください。

2) 幹事会

下記のとおり幹事会を開催しました。

令和3年4月18日(日)、

5月30日(日)

メール開催

寄付者

■一般寄付(敬称略)

ご寄付の御礼

今年度も会員のみなさまから多くの寄付をいただいております。幹事一同、感謝とともに励まされる思いでございます。みなさまのご厚情を留学生に届けるべく、コロナ下での支援活動に活用させていただきます。ありがとうございます。

(令和3年3月15日～令和3年6月30日)

安藤浩行 梅田由美子 河野喜代子
片岡護 勝又美智雄 北尾隆昭
北川哲也 挙市玲子 高橋元
武田宜子 谷平憲治 橋本隆二
疋田妙子

※お名前につきましては、異体字のために正しく表記されない場合がございます。万一間違いがありましたらお詫びいたします。その節は、当会までお知らせくだされば幸いです。

令和3年6月30日現在

会員数：851名

すべての活動は、皆様の年会費とご寄付で行われております。本年度会費を同封の振込用紙にてお振込くださいますようお願い申し上げます。

29年度新入学の会員の皆様は、お納め頂きました4年分の会費の期間が終了致しましたが、引き続きご協力くださいますようお願い致します。

※ ひとりでも多くの方々の納入のご協力をお願い致します。

一般会員：年会費 3,000円

協賛会員：年会費 20,000円

お問い合わせ先

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-2
東京外国語大学国際交流会館2号館1階
留学生支援の会連絡室

TEL: 042-330-5803

FAX: 042-330-5189

*現在、連絡室は閉鎖しています。

お問い合わせ等はメールでお願いします。

ryugakuseishienokai@gmail.com

留学生支援の会ホームページアドレス

<https://www.tufsissa.com>

皆様ぜひ、アクセスしてみてください。

会員の皆様からの情報もお待ちしています！

HPとあわせ、留学生支援の会のフェイスブックでも、活動予定等ご紹介しています。

<http://www.facebook.com/tufs.issa2>

ご寄付のお願い

長引く新型コロナ禍により、困難に直面する留学生に対し、支援の会では昨年度に引き続き、緊急生活支援金を支給することと致しました。しかしながら、会の収入源である春と秋のバザー・外語祭期間中バザーの開催中止を余儀なくされるなど、財政的に厳しい状態にあります。留学生に対し、より多くの支援活動ができますよう、会員の皆様の温かいご理解とご支援をお願い申し上げます。

ゆうちょ銀行

口座番号 00130-3-192674

加入者名 東京外国語大学留学生支援の会

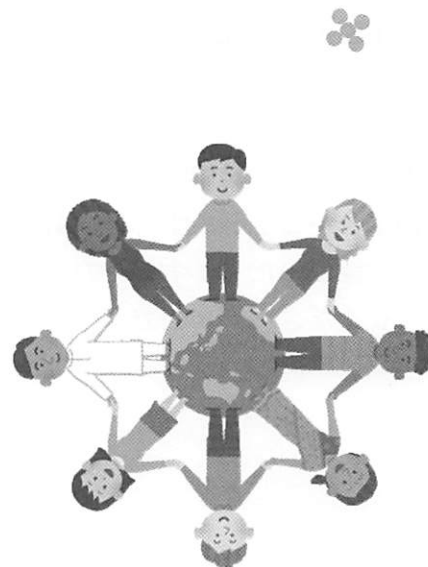
編集後記

新型コロナウイルス感染症拡大の影響が長期化しています。オリンピック・パラリンピックも首都圏は無観客開催が決まりました。ワクチン接種は進んできましたが、今後の終息はまだまだ予断を許さない状況です。皆様のご支援が留学生の大きな支えになります。お力添えをよろしく願いいたします。

新入会員の皆様、ご入会ありがとうございます。会の活動や会報にも多くの声をお寄せくだされば幸いです。

会報67号の発行が大変遅くなりましたことをお詫びいたします。

(木全)



©Copyright 2021, TUFSS International Student Support Association

東京外国語大学 留学生支援の会 会則

第1条（名称）

本会は「東京外国語大学留学生支援の会」と称する。これを「東外大留学生支援の会」あるいは「東外大支援の会」と略称することができる。

英文表記は Tokyo University of Foreign Studies — International Student Support Association とし、英文略称を TUFSS-ISSA とすることができる。

第2条（所在地）

本会の事務局は東京都府中市朝日町3-11-2、東京外国語大学（以下、東外大と略記）に置く。

第3条（目的）

本会は、東外大に在籍する外国人留学生、研究者及びその家族への支援、並びに彼らの日本理解を深め、日本人との友好親善を促進する活動を行うことを目的とする。

第4条（事業）

本会は前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

1. 留学生の生活がより快適なものになるような支援事業
2. 留学生の日本理解が深まり、日本人との友好親善が促進できるような支援事業

3. 活動状況を広く知らせる会報、ニュースレター等の作成と発行
4. その他、本会の目的達成に資する事業

第5条（会員）

本会は国籍の如何を問わず、本会の目的に賛同する者で組織する。会員はいつでも役員会（幹事会）に事業に資する提案ができ、また事業に参加することができる。

第6条（役員）

本会は次の役員を置く。

名誉会長	若干名
顧問	若干名
会長	1名
副会長	2名
事務局長（幹事長）	1名
幹事	20名以内
会計	1名
監事（会計監査役）	1名

第7条（役員を選任）

役員は次のようにして定める。

1. 会長、副会長、幹事、会計、監事（会計監査役）は総会で出席者の半数以上の賛成をもって選出されるものとする。
2. 役員名簿は年度当初に別表で明示する。

第8条（役員の職務）

役員の仕事は次の通りとする。

1. 会長は本会を代表し、幹事会を招集し、議長を務める。

2. 副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときは、会長の職務を代行する。

3. 幹事は総会を構成し、総会の議決に基づき、本会の業務を執行する。

4. 幹事長（事務局長）は議決に基づき、幹事の業務を指揮する。

5. 会計は、本会の会計年度の予算案、決算報告案をまとめる。

6. 監事（会計監査役）は本会の会計執行の状況を監査する。

第 9 条（役員 の 任期）

各役員 の任期は 2 か年（通常は 4 月から）とする。但し再任は妨げない。

第 10 条（幹事会）

幹事会は原則、毎月開催し、総会（幹事団と会員有志で構成する拡大幹事会）は通常、年 1 回開催する。幹事会は議事録を作成し、会員がいつでも閲覧できるようにする。

第 11 条（会報）

本会の活動状況を広報する会報は通常年 3 回（2 月、6 月、11 月）発行し、必要に応じてニュースレターなどを追加発行する。

第 12 条（事業費）

本会の事業運営経費は会費、寄付金およびその他の収入をもって充てる。

第 13 条（会計年度）

本会の会計年度は 4 月 1 日に始まり、翌年の 3 月 31 日に終わる。

第 14 条（決算報告）

会長は毎会計年度終了後、決算報告書を作成し、会員に公表しなければならない。

第 15 条（会則）

本会の会則は総会において出席者の 3 分の 2 以上の賛成で成立し、かつ改訂できる。

附則

本会則は制定の日（2019 年 4 月 21 日）から施行する。

別表：2021 年度役員名簿

名誉会長	中嶋洋子
顧問	笹岡太一 梅田由美子 杉森弘子 鮎澤孝子
会長	谷和明
副会長	勝又美智雄 岡田昭人
幹事長	井上久美子
幹事	阿部やよい 大谷達之 河野貴光 河野喜代子 北村みどり 木全繁 木全玲子 小平京子 近藤一郎 佐久間美知 末次透 高橋京子 野口久仁子 山田和子 山崎智子 山根博彦 米山智榮子
会計	阿部やよい
会計監査	川口健一

東京外国語大学 留学生支援の会

No.68
第68回発行

会報

Since 1999

【お知らせ】次年度春期バザーについて

2年間にわたって中止してきましたが、感染が収束に向かえば、次年度春の開催に向け検討を始めます。可否の確定次第、ホームページでお知らせします。

Pick Up
Event 2021

留学生支援の会の活動に参加してみませんか？

留学生の笑顔を作る活動です。興味のある方は当会までお問い合わせください。

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-2 東京外国語大学留学生支援の会 TEL 042-330-5803 FAX 042-330-5189

<http://www.tufsissa.com>

Contents

Page 1.	1. 巻頭言
Page 2.	2. ご挨拶
Page 4	3. 活動報告
	(1) 私費研究留学生に対する緊急給付金
	1) 事業概要
	2) 受給者5名の報告文
	(2) 大学フードパントリーへの協力参加
	(3) 対面式日本語広場の再開
	(4) 今後の活動
	1) コロナ前の事業の段階的再開
	2) 留学生の生活支援の継続・拡大
Page11.	4. 留学生の声
Page13.	5. 会員から
Page14.	新入会員・ご寄付御礼
	幹事会から

FOCUS



1. 巻頭言

アフターコロナ時代の学生生活支援に向けて

東京外国語大学 学務部学生課課長
大野 智子

昨年来のコロナ禍における学生支援のあり方については、大学関係者はもとより、各種マスコミでも折りに触れて取り上げられているところですが、去る10月24日に東京都による「リバウンド防止措置」の期間が終了し、各種の制限緩和に向けた動きが、各大学においても進んでおります。本学においても、今年度の早期の段階から、アフターコロナを見据えて、学生間、学生と教員間のコミュニケーション不足の解消に向けた取組を進めてきました。

まず、安心して対面で活動できる環境を学生さんに提供するため、大学でのワクチン接種を実施し、留学生も含め本学学生の3割弱の方に利用いただきました。秋学期からは、自身での健康観察

をサポートできるよう、抗原簡易検査キットの配付を行っています。平行して、昨年から失われてしまった大学での対面での活動機会を取り戻すべく、課外活動の制限解除も進め、10月1日からは、他大学に先駆けて活動制限の大幅な解除を行いました。11月に予定されている外語祭もハイブリッド開催で対面企画の実施も予定しております。留学生も含めた多くの学生が、こうした場を利用し、交流の場を拡げていただければと考えております。

一方で、学生たちの声を聞きますと、これまでの自粛生活から対面活動が活発化していくことを歓迎する声があるものの、急激に対面活動が拡がることに不安を覚える学生も一定数いるようです。事情は異なりますが、留学生に関しては、まだ日本に入国ができない学生もいます。制限の解除が進んでいく中で、自分は取り残されてしまった、と学生が感じないような配慮が、これからは重要になっていくと感じています。

また、学生課では、昨年より、コロナによる家計急変等による経済的困窮に対応するため、各種の支援を実施しております。

今年度は、国による支援策とは別に、本学独自の支援策として、3万円の給付金を春学期と秋学期の2回払い、400名余の学生の経済支援を行ったほか、大学生協の食券を同じく約400名の学生に配付いたしました。3万円の給付金事業、またコロナ禍に拘わらず実施しております授業料免除申請等の各種手続きにおいては、留学生が置かれている状況も踏まえつつ、居住地により不便が生じないよう、学生課におきましても、担当者が日々心を砕いて対応しているところです。

昨年より、食料支援も実施しており、今年度は4回のフードパントリーの実施を予定しています。学生からの要望を受け、希望者には併せてサニタリー用品を配付しているほか、ささやかではございますが、留学生のため、配付する食料品の中にハラルを入れる等の工夫をさせていただいております。10月28日に実施したパントリーにおきましては、留学生支援の会からの「サプライ

ズ企画」として、留学生のみならず日本人学生にも果物を配付していただき、大変感謝しております。そのほか、新たな試みとして、秋学期から、大学生協において100円朝食、夕方には100円弁当の提供を開始しました。特に朝食については、国際交流会館にお住まいの留学生の方のご利用を期待しております。

大学を取り巻く環境は日々変化しており、それに伴い、多様化する学生の支援の在り方については、多くの大学が試行錯誤しているのが現状です。そのような中、これまで留学生を多く受け入れてきた本学の伝統は、大きなアドバンテージであると考えております。留学生支援の会の皆様にも知恵をお借りしながら、微力ではありますが、今後の学生支援の充実に向けて勤めて参りますので、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

2. ご挨拶

日本留学 – Definitely very challenging but so rewarding –

世界言語社会教育センター特定研究員

石田 理恵

私が本学で留学生の皆さんとともに過ごすようになり早16年。きっかけは2004年に大学院に設置された平和構築・紛争予防英語プログラム（現：世界言語社会専攻 Peace and Conflict Studies Course）（通称PCS）です。本学初の英語プログラムとして開設されたこの博士前期課程のプログラムには世界各国から、年齢も経歴も異なる学生たちが集まってきます。私がPCSに来たのは開設から1年後の2005年。学生たちがどのような局面に直面するのか、どのような対応が必要になるのか、大学側も手探りでした。学生から相談があると、関係するであろう部署に相談し、対応策を検討していただく、毎日その連続でした。PCS1期生、2期生とは学生と職員というより、同志のような関係でした。

CS コースは世界各地の紛争を研究し、その原因となる政治的、文化的要因を分析し、解決策を探求することを目的に開設され、紛争経験国からの学生たちも少なくありません。今年 10 月に入学した学生たちの出身国は、シエラレオネ、ブラジル、ウズベキスタン、ベトナム、エジプト、ルワンダ、ロシア、スウェーデン、インドネシア、日本、ドイツです。この多様性こそがこのプログラムの特徴です。学生たちはここで異文化と遭遇し、協働を通じて理解を深めます。もう一つの特徴は、英語プログラムであること。入学試験（書類選考とオンラインによる面接）もすべて英語、授業、研究指導、修士論文も英語です。その学生たち、以前は修了後、母国に帰国し、平和構築に携わる仕事に就くものが多かったのですが、最近では日本に残り、就職を目指す学生たちが多くなりました。

この PCS とともに本学で渡日前入試を実施しているのが国際日本学部の海外高校推薦選抜です。国際日本学部は 2019 年度に開設されました。多角的な視点で日本を理解することを目的に、「日本社会」「日本文学・文化」「日本語学」「日本語教育」という 4 分野を学びます。この「海外高校推薦選抜」は渡日することなく、書類選考とオンラインでの面接を通じて選考が行われます。この海外高校推薦選抜でも出願時点では日本語力は不要です。入学後、学生たちは日本語を集中的に学び、3 年次には日本語で授業を受講できるようになることを目標としています。この「海外高校推薦選抜」で入学した留学生が通称 J3 生で、こちらも世界各地から学生たちが集まっています。

このような留学生たちが立ち寄るのが私のいる研究講義棟 523 の PCS オフィスです。「こんな郵便物が入っていた。これは何？」からはじまり、履修や健康面での相談、住居探しに同行することもあります。入学時に日本語は必要ないといっても、日本入国直後から聞こえるのは日本語ばかり。異国の地で言葉がまったくわからないことほど

心細いことはありません。どこで聞いたらよいかかわからない質問でもなんでも受け付けます。まさに留学生向けの「よろずや」です。

とはいえ、すべてを英語で対応できればそれでよいのでしょうか。自分の海外経験を振り返っても、思い出すのは苦勞した話、失敗談ばかりです。そこに出会いがあり、そこから生まれる交流もあります。

失敗は成功のもと。手取り足取り、すべてを英語で対応できれば、本人も安心しますが、失敗し成長する機会を失うことにもなります。私が心掛けているのは、見守ること。留学は本人にとっても、家族にとっても一大決心だったはず。本学で過ごす数年間、多くを挑戦してもらいたいと思っています。コロナ禍により、当たり前だった日常が変わりました。これまでになく、人々が閉塞感を感じ、先が見えない不安を抱えるようになりました。そのような中でも留学生が勇気を出して異国の地という大海原に漕ぎ出すとき、安心できる港が必要です。行き先がわからないときには水先案内人、雨風の日には避難できる場所、疲れたときには心身をリセットできる空間。この研究講義棟 523 がそのような頼れる場所になることができるよう、今日も扉を 10 センチあけて、学生たちの訪問を心待ちにしています。

最後に数年前に卒業した留学生が本学での経験を振り返り語った言葉を紹介させていただきます。It was definitely very challenging, but so rewarding. これからも多くの留学生の皆さんが日本での経験を Rewarding と評してもらえよう、微力ながら応援を続けたいと思います。



3. 活動報告

(1) 私費研究留学生に対する緊急給付金支給事業の報告

1) 事業概要

コロナ禍による仕送りやアルバイト収入の減少により困窮状態に陥った外国人留学生の学びの継続のため、会では昨年度に引き続き、今年度も制度的に困窮度が最も高いと想定される私費研究留学生（正式には私費外国人研究生）を対象とする「留学生の学び継続を支援する緊急給付金」支給に取り組みました。

私費研究留学生とは、自国、あるいは日本の大学を卒業し、大学院（主に本学）への進学を目的にして、「研究生」として専門分野の研究指導を受けている留学生のうち、文科省による国費奨学金を受給していない学生です。正規生ではないため授業料減免措置や公的な緊急給付金の対象外とされ、それだけにコロナ禍の影響も大きいと想定されます。

今年度の私費研究留学生の在籍数は、入学試験の改定により、昨年度より大幅に減少して 25 名でした。このうち 11 名は自国でオンライン受講をしているので除外し、残りの 14 名を対象に、10 万円の給付金を、10 名を上限に支給するという方針で取り組みました。

6 月 23 日に給付金の案内を、対象者全員にメールで送付し、さらに支援の会 HP で周知をはかりました。7 月 6 日の締め切りまでに 5 名の申請を受け付けました。

受給者の選考は、昨年同様、大学教職員および本会幹事からなる 7 名の選考委員会を組織して行いました。審査に際しては、勉学を継続する目的意識とそのための生活計画の有無、給付金を必要とする困窮度の高低を判定の基本とし、申請書に記載された 1 カ月の収支概要、必要アルバイト収入額、コロナ前と現在のアルバイト状況の比較、給付金を必要とする理由、給付金の使用計画等を精査したほか、電話による補足質問も行いました。

その結果、7 月 22 日の選考会議（ZOOM 会議）において、申請者 5 名全員に対する受給を決定し、すみやかに通知し、本人の意思を再確認したうえで、給付金振り込みを完了しました。

感染防止の観点から一連の作業はオンラインで実行しましたが、7 月 26 日には支給者全員に支援の会連絡室まで来てもらい、数名の幹事が面談で生活状況や勉学意欲を確認するとともに、激励の言葉をかける機会を設けました。

5 名の支給者の国、地域別内訳はモンゴル 3 名、中国 2 名（うち内モンゴ 1 名）です。この 5 名全員が、来春から希望する大学院での研究をスタートできることを願っています。

5 名からは、給付金がなぜ必要だったのか、それをどのように役立てたのかななどを、感謝の念を込めて述べた報告が届いています。以下に全文を掲載いたしますので、ご覧ください。

（会長 谷 和明）

2) 給付金受給者 5 名からの報告文

コロナ感染下での日本留学生活 アマルジャルガル シーレブ（モンゴル）

コロナが発生して以来、いろんなところで自分の生活が影響を受け大変なことになったことも多々ありました。例えば、日本に来てから一回も自国であるモンゴルへ帰ったことがなく、コロナの影響でいつ帰国できるかわからなく、精神的にストレスを感じる場面もありました。最初は留学生として日本へ来たなら帰りたいときいつでも帰れると考えていましたが、いきなりコロナが発生し正常な生活のリズムが乱されてしまいました。モンゴルに帰りたくても帰れなくなり、両親に会いたくても会えない日が続く、精神的にストレスと不安がたまつてつらい気持ちになる日が多いです。この問題は私だけではなく日本にいる留学生たちにとって共通的に辛いことだろうと思って我慢するしかないでしょう。

精神的なストレスに加えて学業でも影響を受

けています。私は東京外国語大学に入学してから一度も教室で皆さんと一緒に勉強したことがありません。学校に行かなくオンラインで授業を受けて良かったと思う人がいるかもしれませんが、私にとってはとても残念なことです。新しい友達を作れなくて先生と直接話せないし、色々なイベントに参加できず正常な学校生活を送れていないと思います。ずっとオンラインで授業を受けると時々つまらなくて勉強する気がなくなってしまいます。

また、生活の経済面における影響が一番大きいと考えています。コロナ禍の中で、レストランのバーテンダーとしてのアルバイトシフトが急に減少し、バイト代もそれに伴って急激に少なくなり、日本における学費と生活費を負担するために私は両親からもらうしかない状況になっていて、両親に負担をかけてしまうこととなりました。

上述のようにコロナの影響で生活のいろんなところで大変なことを経験をしています。しかし、この状況だからこそ悲観的に考えないことが大事だと私が思い始めました。私はこの一年で気づいたことの一つは、心配するのは悪いことではないということです。心配と不安を抱えているからこそ、我々は何をすれば良いか、またはすべきことについてよく考えて行動するようになれる。家族への心配があるからもっと親に電話をかけたり、「愛している」ということを伝えたり、今という「時」を大事にしています。コロナが私たちに教えてくれたことは「別れや苦しみ」だけではありません。「身近にあるものの大切さ」もあるのではないのでしょうか。

元の世界へ戻りたいと考えるのではなく「今」を大事にしたいと考えていれば、いつかその「時」がきつくと私は信じます。この時期は我々にとって「昨日の自分より良い自分」になるための時期であると考えます。これからも油断せずコロナ禍が終息するまで色々頑張って元気で生活していきたいと思います

日本語教師を目指して、東京外国語大学で留学を選択した。大学院で日本語学についての知識を研究しようと思います。研究テーマは「にかかわらずの意味用法」である。コロナ感染環境での日本留学生活は温かく感動的だった。

2020年1月以降、covid-19の流行は多くの人々の生活を一変させました。ウイルスが猛威を振るい、一人一人にとって試練となっています。留学生も例外ではありません。国際航空便は流行の影響を受け、帰国もできず、学業や生活にも様々な影響が出ています。伝染病による不便は多いが、私は様々な温かさに感銘を受けている。

温かさは東京外国語大学から来た。去年の授業はずっとオンライン形式だったが、先生達の親切で暖かい笑顔を見て、私に引き続き努力する自信を与えた。感染が徐々に緩和してから、今年の前回は対面授業を受けた。教室で他の生徒たちと一緒に勉強するのは幸せだと思っている。感染症にもかかわらず、教室の窓から外を眺めると、いつも絵のような景色が目飛び込んでくる。私達もその植物のような積極的に生き続けるように、努力しようと思っている。

また、留学生支援会のおかげで、さまざまな生活支援を受けた。10万円の支援金をもらって、3万円の大学院に進学する受験料を適時に納めた。残りの7万円は研究生の後半期学費として蓄えている。生活上のストレスをさらに緩和し、勉強に集中できるようになっている。

温かさは友達や家族から来た。中国にいる友人からの励ましや家族からの気遣いを受けた。遠く隔ですが、暖かい親心は長く私の心の間を残します。国内からマスクや免疫力を高める薬がもらった。それぞれの祝日は一堂に集まることはできないが、ビデオでコミュニケーションを取り、お互いへの祝福と関心を示す。

温かさは中国大使館から来た。中国大使館はいつも私達の健康状況に注目して、そして絶えず私達のためにいくつかの防疫物品を準備して、健康バッグを配布した。

私も感染症を防止するために、毎日 30 分の運動で健康を保っている。人が密集している場所には行かない、マスクをしてコミュニケーションを取る。常に体温を測り、外から買ってきた食品のパッケージを消毒する。感染予防対策は生活に多少の不便をもたらしたが、小さなトラブルが大きな安全をもたらした。ウイルスが流行は続いているが、対策さえしっかりしていれば、自分と他人の安全を守ることができると思っている。

コロナ感染下での日本留学生活

デリハ・ボルジン（中国）

2021 年 7 月下旬の時には、東京外国語大学留学生支援の会から 10 万円の緊急生活寄付金をいただいて、とても助かりました。その時、緊急事態宣言また延長していった、コロナも収まらず、私たちのような外国人留学生にとって生活状況に悪い影響を受けてきました。コロナの前は、アルバイトの機会も多くて、週の出勤時間も十分で、生活費には心配することはなかったのですが、コロナ感染拡大によって、政府の長続く緊急事態宣言も終わらず、アルバイトをする出勤時間も減ってしまいました。特に、今年の 5 月から出勤時間の減ることに伴って、給料も下がりました。

みんなご存知のように、コロナは世界中で大変大きなダメージをもたらしました。特に、経済的な悪い影響は一番回復しにくく、失業率も非常に大変な実態です。私の故郷は中国の内モンゴル自治区ですが、両親からそこ側の状況をよく聞いてきました。内モンゴル自治区の経済活動はコロナの影響でものすごく悪くなってしまったと、そして私の母親は自分で靴下を売る小さいお店を営んできましたが、残念ながら、今年の 5 月の下旬に潰れてしまいました。父親の仕事も今年の経済不景気によって、収入が減りました。したがっ

て、日本に留学している私にとってはこういう困難な実態をよく考えて、自分の力で生活して行かなければならないです。ですが、日本の経済活動もなかなか復活していく様子が見えにくくて、特に、自分の生活費を自分で稼がなければならない外国人留学生たちには大変な時期ですが、まだ続いています。

そういう不安があるとき、学校の掲示板に貼っている奨学金についても見ましたが、ほとんどの場合は研究生たちが申請できないので、とても残念な気持ちでした。そして、私の給料が 5 月から下がってきました。生活費の分をきちんと計って使わないとお金が足りなさそう状況になってしまいう傾向が高かったです。食べ物を買うとき、なるべく安いものを買ってきて、ご飯と一緒に食べたり、それ意外の費用はできるだけ使わないようにしたりしました。そして、夏休みに入って、7 月下旬から 10 万円の寄付金をいただいたので、生活費にとっても助かりました。

10 万円の寄付金の 4 万円は 8 月の家賃として使いました。3 万円の分を当校の秋季博士前期課程募集の検定料で使いました。あと三万円は、一万円の方は服を買いました。そして、残りの二万円の分は食費として使っていました。コロナの感染拡大がまだ続いているなか、生活が大変困難に直面していることが誰にとってもあるでしょう。「一日 1 食しか食べていない」。あるモンゴルから来日して都内で暮らす大学 4 年生の男性(21)は新型コロナウイルス下にコンビニストアと 100 円ショップのアルバイトの職を失い、所持金がなく貧乏に直面しています。家賃を 1 ヶ月分滞納すると、家賃保証金会社から電話が連日かかってくるようになったというニュースを見たこともありまして、みんなほぼそういう大変な時期の中にいると感じました。私の生活はそこまで貧乏な程度に至ってないですが、毎日非常に危機感を持っています。

しかしながら、我々は絶対コロナに負けないという気持ちでチャレンジしていく勇気を持っていかなければなりません。通常通り、笑顔をして

今一の状況を越えるように頑張っていきたいと思っております。

コロナ感染下での日本留学生活

ガンボルド オチルフヤグ (モンゴル)

私はモンゴル出身です。まず、東京外国語大学での選択したのは、もともと私は日本語教育に興味があり、その知識はもちろん、日本について国際的見解から学んでいきたいと思ったからです。また、留学生がたくさんいるという環境の中で外国語を学べること、将来の夢にも一番の近い道になる教育環境だと考えました。

大学院で心身変容を医療と表現について研究したいです。また、私は新型コロナウイルスを掛かった後、人間は体的にいつまで若く生きていく方法について研究したいことも興味が深いです。

大学に入学して以来、ずっとオンラインで授業を受けたんですが、最初はあまりならなくて大変だったが、授業を受けたら受けるほど慣れて来ました。新型コロナウイルスの中でアルバイトをするより外を出るのは怖がりました。アルバイト先の日本人がコロナを掛かった影響で私はアルバイトをやめました。他のアルバイトを見つけたんですが、生活費に足りるぐらいでした。日本から特別定額給付金を給付して本当に助かりました。

1月11日に新型コロナウイルスのPCR検査を受けて、新型コロナ感染者に掛かりました。その、影響で二月間にずっと家にいった。授業を受けるのは辛かった。けれど、朝霞保健所の丁寧の先生達のおかげでよく治りました。この間、家族からずっとお金を受け取ったんですが、生活費のお金を足りない時、友達から借金して生活を続けて来ました。

三月からアルバイトに戻ろうと思ったけど、私の代わりに誰か募集したそうだった。三月にアルバイトを何回探しても、アルバイトを見つからなかった。4月から今まで空いている日にヤマトというアルバイトをしていました。毎月収入した金額は借金したお金を払い、生活に足りるようにし

ていました。また、この状態はいつまで続けるか不安だった。

古川先生の授業で大学から緊急生活給付金を申込中というお知らせを聞いて、私より苦しんでいる学生がいると思いましたが、私の立場で不安の状態でも夏休みを過ごすと勉強に集中を出来ないと考えました。なので、緊急生活給付金の申込を記入して提出しました。

留学生支援の会から電話があつて、あなたに支給をするから大学の留学生支援の会に言ってくださいと言われました。7月26日に支給を貰える学生達と親切な先生達でおしゃべりし、みんなで楽しみに話しました。その時、留学生支援の先生達に自分のありがたい気持ちを表さなかったと思ったので、今の作文で本当にありがとうございましたと伝えたいです。

支給したお金は今まで使わなかったです。私は秋学期の学費を支払う予定です。夏休み中に学費について心配しないで、研究に集中を出来て嬉しいです。私に合っていることを具大的にそのまま言いたいことで日本語を間違えたら謝りがあります。どうぞ宜しくお願いいたします。

コロナ感染下での日本留学生活

バトバートル エンフバヤル (モンゴル)

新型コロナウイルスの影響で2020年4月3月からアルバイト収入が完全になくなり、生活費や授業料などで困っているため申請し、留学生の学び継続を支援する緊急給付金10万円を頂きました。羽田空港で機内掃除のアルバイトをしていた私の生活にコロナがとても大きな影響を与え、コロナ以来、飛ぶ飛行機の数減ったため、アルバイトが完全になくなり、生活費や授業料を稼げなくなり、日常生活で大きな困難を感じるようになったいた私が、大学の留学生支援の会から頂いた緊急給付金10万円のお陰でメンタル的にも良くなり、今後の日本での生活に自信を持つようになりました。

アルバイトがなくなりそれ以来、生活費や授業料で日本に来てから2年間一生懸命頑張って稼いだ貯

金が完全になくなってしまい、これからの生活費用や授業料をどうやって払うかとても心配でした。当時、バイトを探していたが、なかなか見つからなく、アルバイトを募集している所が少なく、募集しているところでも何回か面接を受けたが全部落ちてしまい、大変な状況でした。母国モンゴルにいる家族もコロナで生活が困ったいたため、年金で生活をしている母親やコロナの影響でビジネスが困難な状態である兄弟たちからお金をもらうことが出来ませんでした。そういった状況にいた私が授業で教員から大学からの「緊急給付金」について聞き、申請しました。

申請した結果、緊急給付金として10万円を頂くことになり、大変嬉しく思いました。家族もいない外国で経済的に大変な状況にいた私を助けてくれた大学の留学生支援の会に感謝しています。日本にきてから日本人の優しさを感じ、日本もっと好きになっています。10万円を頂くことで「これからの大学院に入るためもっと頑張りたい!」「頑張っていれば他はなんとかなるんだ!」という自信を持ち、経済的なサポートだけでなくこれからの人生のモチベーションにもなりました。

10万円の給付金から、6,490円はTOEICの受験料として使いました。また、8月の家賃に3万円、携帯代に1万円、水道・電気・ガス代に1万円を使いました。そして、1万円で食品を買いました。3万円は大学院の受験料に使用する予定です。お金に心配が少なくなることで、ストレスを感じない日々を過ごせるようになりました。今大学院の試験の準備で毎日忙しく過ごしています。前期の授業でお金の問題によるストレスを感じ、心配しすぎて寝不足になり、授業に集中できなかったが、後期の授業や研究に集中できる状況になってので、これからもっと頑張っていきたいと思えます。

最後になりましたが、皆様のサポートに心から感謝しております。

(2) 大学主催フードパントリーへの協力参加

10月28日に開催された今年度第2回目の大学主催フードパントリーに、支援の会も協力参加し、果物(リンゴとミカン)およびムスリム留学生に対するハラール食を手渡ししました。



開始準備をする支援会のスタッフ

大学が独自に実施するフードパントリーは、昨年4回を含めて今回で6回目でした。これは全国的に見ても先駆例といえるでしょう。

本会では、パントリーがコロナ下の留学生支援の有効な方策であることを評価し、第1回目の実施に際しては、大学からの呼びかけに応じて、事業への10万円の寄付を行いました。また昨年末には、主に東外大生が利用しているパントリーを府中市で毎月実施している市民団体フードバンク府中に対して、延べ200人近い留学生への食料提供への感謝を込め、10万円の寄付を行いました。

今回のパントリーへの協力参加は、これまでの寄付という形態から一歩踏み出し、会場の一隅に支援の会独自のスタンドを設営し、会のスタッフ7名が詰めて来場者とコミュニケーションをはか



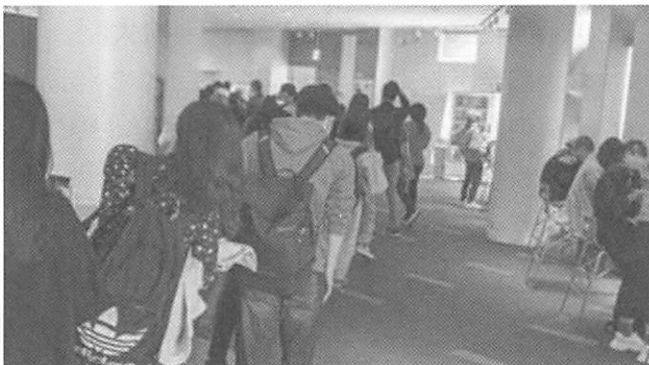
開始と共に殺到する学生たち

り、リンゴなどを手渡すものでした。ささやかではあれ、パントリー活動に直接参加した点に意義があるといえます。

この取り組みは、実施 10 日ほど前の幹事会での「果物があれば学生は喜ぶ」という一会員の発言を口火に、一気に決定され、幹事会女性スタッフの知恵と行動力により短期間で準備されました。そこで皆が目指したのは、(1) メインの食品セットにない新鮮果実をサプライズ提供するとともにムスリム学生にハラール食品を提供すること、(2) 参加学生に声がけて状況を聞き、激励すること、(3) 特に留学生に対しては生活状況についてインタビュー調査することでした。

今回は、緊急事態宣言が解除され、対面授業受講者が増加している下での初めてのパントリーであり、従来とは大きく異なる展開となりました。200 名分の食品セットを準備し、10~15 時の開場時間に配布するという条件は同じでした。けれども前は 15 時で 30 ほど余ったのに対し、今回は 11 時半までに完了という盛況ぶりでした。言い換えれば、短時間の混雑状況だったわけです。

10 時の段階で既に多くの学生が列を作って並び、開始と共に受け取り場所に殺到したので、対応を応援する職員が急遽駆けつけるほどでした。支援の会のスタンドでも学生一人一人にゆっくり声がけし、留学生か否かを確認する余裕もない状況で、あっという間に終わってしまったという感じです。前回までの経験に頼った見通しの甘さがありました。



10 時過ぎには長蛇の列が

それでも何とか 7 名の留学生にインタビューできました。ほかに時間がなくて去った留学生が 4 名おり、合わせて最低 11 名の留学生の参加が確認できます。なによりも、多数の学生にリンゴなどを提供できたこと、そして学生たちにほぼ 2 年ぶりに対面式で応対して支援の会の存在を伝えることができたのは、大きな成果だと思います。

対面授業が実施されている下でのパントリーのあり方という観点からは、会場時間帯の設定、会場内の人流整理、スタッフの配置、混雑の緩和など、検討すべき問題があるように思います。それらに関する提言も含めて、今後の大学フードパントリーに対し、会として可能な協力、参加を行っていきたいと考えています (16 ページ「生協で 100 円定食」も参照ください)。 (谷)



仕事を終えて

(3) 対面式日本語広場の再開

前号でお伝えしたように、2020 年度にはコロナ感染防止の観点から中止していた対面式の日本語広場を、大学院博士後期課程に在籍する女性研究者からの 3 名の子女への日本語指導の相談を受け、広場担当の小平幹事が講師の北村先生と日時、条件等を調整して、上記 3 名の児童を対象として今年度 4 月から開始しました。ところが緊急事態宣言によりまたもや中止せざるを得なくなっていました。

この対面式日本語広場ですが、9 月末の宣言解



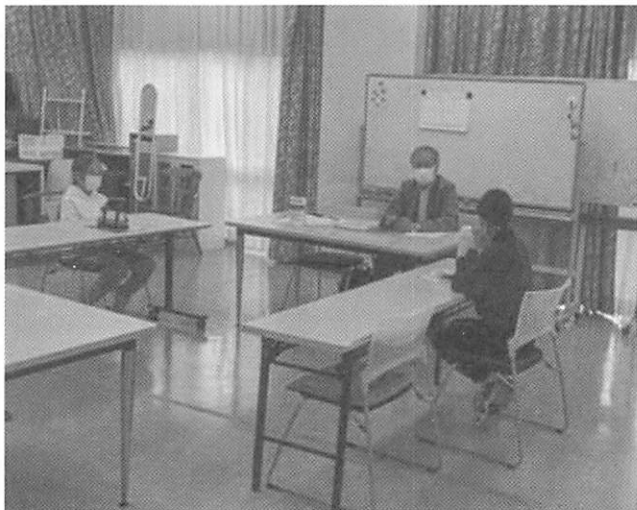
除とその後の感染減少傾向を踏まえた小平幹事のご尽力により、10月13日から再開しました。再開に合わせて、別の

大学院在籍女性研究者からも子弟の日本語指導の申し込みがあり、講師の北村先生の面接を経て同じ広場に参加を認めることになりました。こうして、現在毎週水曜日の午後、4名の児童の参加する日本語広場が開催されています。

3枚の写真は10月20日の様子で、撮影時には2名の出席でした。上から順番に、まず開始前に検温と



手の消毒を済ませ、次に入室後に机などを全員で消毒し、そのうえで和やかな雰囲気での対話式の授業が始まりました。このように、様々なことにまで気を配って指導して下さる講師の先生に感謝します。(谷)



(4) 今後の活動

10月に入ってからのコロナ感染者数の動向か

ら、事態収束も遠からじという希望的観測が生じ、社会活動も平常化に向けて舵が切られた感があります。マスク着用は維持しつつも、三密を考慮しない振る舞いが増加し、さまざまな公共の場でもコロナ前の混雑が復活しています。これがリバウンドにつながらないことを希望しつつ結果を観察する、いわば実験状態にあるといえましょう。

1) コロナ前の事業の段階的再開

本会としても、感染状況の動向をにらみながら、可能な事業の再開に取り組んでいます。

①10月13日からは留学生、外国人研究者の家族を対象とする日本語広場を再開しました(上記(3)参照)。

②10月20日には学会発表のための交通費補助の公募を開始しました。学会はほとんどオンライン開催ですが、要望があれば対応します。

③11月からは、会のキャンパス内活動の拠点である連絡室を週2回、火曜日と金曜日に開室します。寮で生活する留学生はもちろん、通学してくる留学生への支援・交流の進むことが期待できます。

④2年間にわたって中止してきたバザーですが、感染収束の傾向が続けば、翌2022年度の春からは開催できると希望的観測をしています。この件に関しては、来年になり確定次第HPなどでお知らせしますので、もうしばらくお待ちください。

⑤文化理解・交流プログラムへの期待は根強いので、実施可能性があれば適宜企画します。

2) 留学生の生活支援の継続・拡大

コロナ感染が収束に向かうとしても、2年間のコロナ禍の直接、間接の影響による留学生の生活困窮は相当期間継続するでしょう。支援の会としては、皆様から寄せられた寄付金、会費を活用するためにも、この間取り組んできた緊急生活支援策をさらに展開して参ります。

①今年度事業計画で、昨年12月の留学生生活実態調査で生活状態が「非常に苦しく、留学を続

4. 留学生の声

後悔することのないよう 失敗を恐れず行動したい

ハイポワ・シリ

(トルクメニスタン：大学院博士前期課程2年)

中央アジアの一つ魅力的な国—トルクメニスタンから参りました。ハイポワ・シリと申します。2012年トルクメニスタンのアザディ世界言語大学東洋学部日本語学科に入学しました。残念ながら日本に来るために留学試験を何回受けても、学部の際、日本に留学する事ができませんでした。でも目標を達成するためにあきらめず最後まで頑張りました。結局、日本に来られました。日本に来るまでに日本語と日本文化をよく学んで、日本について調べました。

2019年に研究生として日本に来て、2020年に東京外国語大学博士前期課程に入学しました。トルクメニスタンの国際化と学生モビリティについて研究をしています。あと何年間ぐらい日本に生活を進めて行きたいので、就活や進学を考えています。

日本へ来てからの留学生活で、印象に残ったことが色々あり、日本へ来る前に、テレビや本を通して、日本を理解していました。日本人は、とても厳密だと言われます。本当にそうかもしれませんが、細かいところまでも気にする人が多いです。もう一つは日本人がすごく優しく、親切な方々



けられるか不安である」と回答した14名の留学生に対して、状況を調べ、相談に応じ、必要な支援を取ることを決め、予算50万円を計上しました。遺憾ながら着手が遅れ、10月になって14名へのメールを送信しました。1名からは、以下のような内容の回答がありました。

一年間ほとんど収入がなく、修士論文を書いていたので、精神的に不安定になった。博士を目指していたが、失敗したらどうなるか凄く不安だった。バイトも急に中止になり、お金も足りなくて食事もちょうと取れなかった。

その後、博士後期課程に進学して、バイトも一応50パーセントぐらい戻ったので生活状況も少し緩和した。

その他の学生にも、回答状況をみながら、積極的に対応していきます。

②やはり事業計画で総額30万円を限度とした試行的な生活資金貸付制度を設けることを決定しました。その実施要項を早急に作成し、当座の生活費不足者への貸付を行います。

③奨学金、授業料減免を受けていない正規留学生に対する緊急給付金の支給事業を、私費研究生対象の給付金事業の予算残額も併せて実施すべく、給付条件の細目を検討しています。育児中の女子留学生を優先することも検討中です。

④3000円程度の商品券を、会への協力への謝礼のかたちで幅広く配布する事業も計画し、「協力」の内容を検討中です。

⑤ISEP留学生への来日直後の支援策にも、来日の日程や手順が決まった段階で、取り組みます。

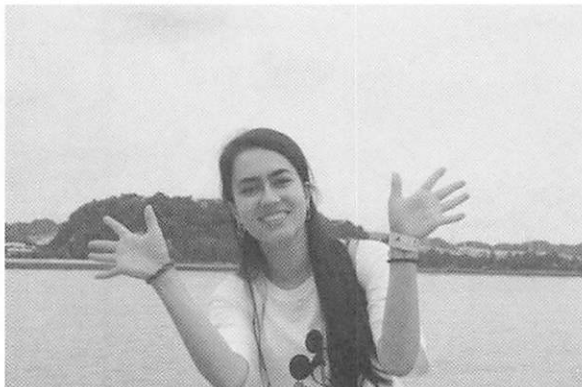
(谷)



も多いと思います。例えば、ハガキを郵送るとき、郵便局の係は、すごく丁寧に切手を貼り、飲食店でコップが空くと、店員さんはすぐに水を出してくれています。お店で買い物した後、店員さんは入り口まで送り、そして、丁寧に辞儀をします。これは日本では約束されたことですか？当たり前とされることですか？ それだけでなく、バスを待つときにも、自ら列を作ります。バスの中も、とても静かで、本などを読むこともできます。エスカレーターでは、皆さんは右側に立って、左側は全部急ぐ人のために空けておくのです。ラッシュアワー時は、とても壮観です。しかも、びっくりしたのは、一人もこのルールを破壊していないことです。このルールは、法律で規定されたものではありません。しかし、日本では、大体全員が、これを守ります。この文化は、世界中で褒められるべき日本文化だと思います。

この留学経験は、今後の私の人生に非常に役に立つと思います。この体験は一生の宝物です。少なくとも、私は勇敢に、自分がやりたいことを選び、せっかく留学してきました。若い時には、失敗を恐れてはいけません。最も恐れるのは後悔です。やらないで後悔するのではなく、思い切ってやってみる。それが不完全なものであっても、思い切って行動するのが青春だと考えています。これが、私が日本に留学してきた一番の理由の一つです。

私は留学支援センターについてカザフスタンからの友達から聞きました。留学生のために様々な支援センターなどがあるとありがたいです。悩みや相談などがあればすぐ学生支援センターに



行くといいと思います。留学生のために頑張っていて、力を入れているスタッフの皆様に心からお礼申し上げます。

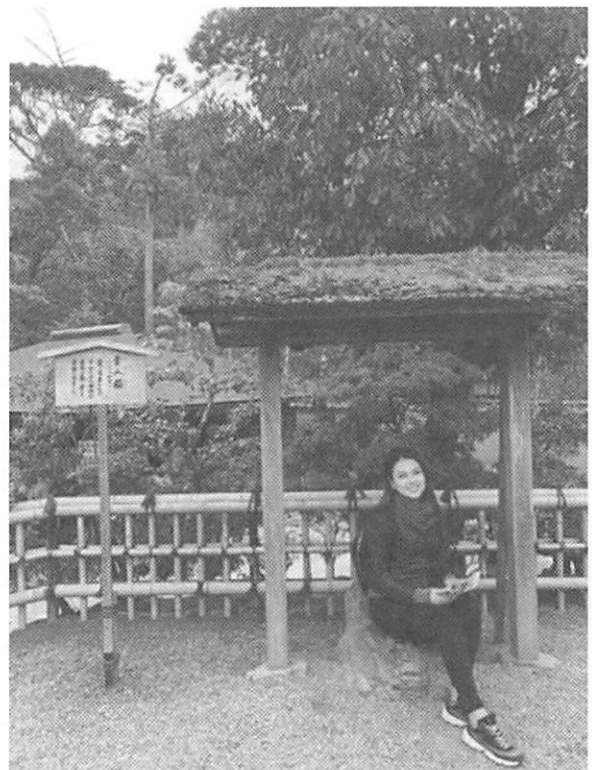
留学生支援の会についての 情報共有の大切さ

イブロヒモワ・ズライホ

(ウズベキスタン：大学院博士前期課程2年)

私はイブロヒモワ・ズライホと申します。ウズベキスタンの首都であるタシケント出身です。2010年にタシケント国立東洋学大学附属高校で日本語を勉強し、高校時代から日本語・日本文学に興味を持ち始めました。日本語を専門的に勉強し、将来ウズベキスタンと日本の架け橋になるために2013年にタシケント国立東洋学大学・日本語学科に入学し、2015年に和歌山大学に留学しました。ウズベキスタンの大学で日本語を日本人の先生方に教わっていたので、日本に来てから違和感がなく、来日初日から留学生活が楽しめたと思います。

和歌山大学留学経験のおかげで日本、日本人、日本文化が好きになり、また日本に戻って、ここ



5. 会員から

娘の留学を通して今思うこと

幹事 佐久間 美知

娘の入学がご縁で、留学生支援の会の活動に参加させていただいてから、早いもので8年が経ちました。

娘は大学3年生の時に、フランスのリヨンに留学しました。今から約6年前です。現在のコロナ禍では、フランスに限らず、海外のどの国への入国もままならないことを思うと、娘は幸運なタイミングで留学生活を送れたのだと感じています。ただ、当時のヨーロッパも、各地でテロが多発していて、非常に不安定な状況ではありました。

私はかねてから、娘の留学に際して、この機会に是非とも苦学生の経験をさせたいと考えていました。仕送りは最低限にして、シンデレラが居たような屋根裏部屋に住み、固いパンをかじって暮らせばよい、と思っていました。

しかし、娘の出発が近づくにつれて、悪いニュースがどんどん入って来るようになりました。もう、心穏やかではられません。大学の寮に住むのなら安心、ホームステイでもちょっと安心。ところが娘は1人で学外のアパートに住みたいと主張します。結果、双方折り合って、大学から2つ3つ離れた駅に近い学生専用のマンションを契約することになりました。「まずはセキュリティの高いところ。」「上階で、通りに面した部屋。」「耐震性のある新しい建物！」心配な気持ちに肩をゆすぶられて、次々に甘い提案をしてしまいます。「予備のお金を少し持って行きなさい。」言ってしまったことで、当初の目論見はあえなく崩れ去りました。

8か月の留学を終えて、娘は無事帰国しました。学業の合間を縫って、ヨーロッパを精力的に周遊したようです。数日の時間差でテロ現場となったベルギーの広場から、ご機嫌な写真が送られてきて腰を抜かしました。心配が募って、繰り返して

で活躍したいという気持ちが強くなりました。ちなみに、私の日本の実家が和歌山です。2016年9月に和歌山大学留学を修了し、ウズベキスタンに帰りました。2018年に学部を卒業してから、東京外国語大学に研究生として来ました。2020年3月に研究生を修了し、東京外国語大学博士前期課程に入りました。現在、修士課程では日本の高等教育制度を参考にし、独立後のウズベキスタンにおける高等教育の変遷について研究しています。まだしばらく日本で活躍したいと思っています。

東京外国語大学に留学し、一人暮らしを始めました。ウズベキスタンでは実家に住んでいたの、一人暮らしを始めてから日常生活で気づかなかった困難さと責任もあることを実感しました。しかし、留学生活は相変わらず楽しんでます。

今まで「バザール」についてだけいろいろ聞いていましたが、東京外国語大学にある留学生支援センターについて聞いたことがなく、実際に使ったこともありません。留学生としてこのような頼りになる支援センターがあることを嬉しく思っています。しかし、情報共有がうまくなされていないものもあるかもしれませんが、留学生支援センターについてもっと大勢の留学生に知ってもらいたいです。留学生生活がもちろん楽しいですが、体調を崩したり、生活の面で困ったりするような思いがけないこともあると考えます。その場合、相談に行ける、悩みを聞いてくださるような支援センターがあることが安心です。大学内で留学生支援センターについての大事な情報をもっと共有すれば、留学生も喜ぶと思います。これからよろしくお願いたします。



った LINE のメッセージに、スタンプ一つで返してきても、次スルーされたら困るから文句は言えませんでした。

この件を、支援の会で親しくなった留学生に話しましたら、私の対応が優しすぎる（甘すぎる、でしょうね）と指摘を受けたことを覚えています。外国のお母さんは強く、賢いので、少々のことですらたえて信念を曲げたり、子供に遠慮したりはしないようです。二十歳を過ぎても、お母さんは怖くて頭が上がらない存在だと、皆口を揃えて言います。

現在も、コロナ禍の困難を承知で子供を送り出せるのは、その強さゆえかもしれません。私にはできなかったかもしれません。それでも、子供を心配する気持ちに差はなく、きっと皆様不安な気持ちで過ごしていらっしゃると思います。

このような大変な時期に、日本を選んで来てくれた留学生の一人ひとりが、各国のお母さんからの大切な預かりものであることを心に留めて、どのようにサポートしていけるのか、今後も会の皆様と考える参りたいと思います。

コロナ禍と留学生支援の会

幹事 河野 貴光

娘は、高校時代 AFS の交換留学生として、一年間スペインのホストファミリーはじめ現地の方々から大変お世話になりました。そのお礼の気持ちから、海外から日本に留学してくる高校生のために、以前、AFS のボランティア活動に関わらせていただきました。

三年前の娘の東京外国語大学の入学の説明会の時に、同じように海外からの留学生のための支援の会があることを知り、娘も海外留学で再び現地の方々にお世話になる機会があるかと思い、この会に参加させていただきました。実際娘は、最初の1年間コロナ禍ぎりぎりでしたが、ブルネイ、ヨルダンの留学で現地の方々に大変お世話になりました。

この会の活動に参加して3年目になります。最

初の1年間は多くの対面活動に参加させていただき、留学生との行事での直接の触れ合いや、またバザーなどで協力いただいた多くの皆様に直接この会の活動を理解していただく機会がありました。現在、オンラインの繋がりでは活動ができないことはないわけではありませんが、やはり対面で留学生と直接話したこと、例えば日本文化を知ってもらう川越散策の行事で、宗教上の理由で食べる物に制限があり困ることが多い、という話を直接留学生から聞き、頭では分かっていることですが、実際に本人と話し、その苦労の実感が伝わってきました。そのような貴重な機会を失わせたコロナ禍のこの二年間の活動は、会としても大変難しいものでした。

しかしながら会員の皆様からの支援・寄付などによりこのコロナ禍の厳しい状況の中、新しい支援活動（給付金制度やフードバンクへの協賛など）を会として行なってきました。ネットを通して留学生の実態把握に努め、本当に厳しい生活を余儀なくされている留学生の実態も把握することができました。皆様からお預かりした貴重な会費や寄付をより有効に留学生支援のために活用させていただきます。引き続き会員皆様のご理解ご支援をよろしくお願い致します。

ご入会・ご寄付、ありがとうございます

新規加入者

■一般会員(敬称略)

(令和3年7月1日～令和3年10月31日)

小川直美 押塚法子

鈴木博之 津田吏江子

真部夕希子

寄付者

コロナ禍の中今年度も会員の皆様から多くの寄付を頂いており、幹事一同、感謝とともに励まされている思いであります。今年度は余り活動ができませんでしたが皆様のこ

れだけの熱い思いを糧に来年度はより一層の活動をして
いきたいかと考えておりますのでよろしく願いいたしま
す。

■一般寄付（敬称略）

（令和3年7月1日～令和3年10月31日）

青木まゆみ	跡部いずみ	鮎澤孝子
五十幡圭右	板久恭子	伊藤真由美
井上久美子	遠藤高子	大塚定
小倉摩椰	小野玲子	加賀晴子
勝又美智雄	金井亜津子	北昌宏
北村みどり	木全玲子	木村かほる
木村三紀子	小島照恵	小平京子
小林佐智子	佐藤桂子	鈴木剛士
鈴木正道	関口洋子	高木幸子
田中研志	頼母木久代	那須紀夫
新山晴美	楡木宏史	庭野泰則
野本京子	長谷川雄一	原田史恵
堀田健彦	増田淳	松井外恵
松田素子	道原雄斗	村上光一
山田和子	横石邦彦	吉田展子
吉田ゆり子		

*お名前につきましては、異体字の為正しく表記され
ない場合があります。万一間違いがありましたら当会
までお知らせくだされば幸いです

幹事会から

1) 幹事会の開催

以下の日程で幹事会を開催しました。

10月17日（日）、11月14日（日）

2) バザー等への物品寄贈について

コロナ感染拡大後も、多くの会員から、バザー
その他の支援のために物品を寄付したいとの有
難い申し出が寄せられました。けれども、せつか
くの品々を学生たちに手渡すことが困難だと判

断し、止む無くお断りして参りました。皆様のご
厚情に対し改めてお礼申し上げますとともに、それ
に適宜お応え出来なかったことをお詫びします。

さて、ようやく感染収束の見通しが出てしまし
た。この傾向が続けば、3年ぶりに恒例のバザー
を開催できるでしょう。可否についての判断は年
を越すですが、決定次第、みなさまにお伝え
いたします。その際には、何卒ご支援、ご協力
をお願いいたします。

3) ご寄付のお願い

長引く新型コロナ禍により、困難に直面する留
学生に対し、支援の会では昨年度に引き続き、緊
急生活支援を行いました。しかしながら、会の収
入源である春と秋のバザー・外語祭期間中のバザ
ーが今年度も中止を余儀なくされるなど、財政面
に厳しい状態にあります。留学生に対しより多く
の支援活動ができますよう、会員の皆様の暖かい
ご理解と支援をお願い申し上げます。

振込先

ゆうちょ銀行

口座番号 00130-3-192674

加入者名 東京外国語大学留学生支援の会

令和3年10月31日現在

会員数：853名

すべての活動は、皆様の年会費とご寄付
で行われております。本年度会費を同封の
振込用紙にてお振込くださいますようお願い
申し上げます。

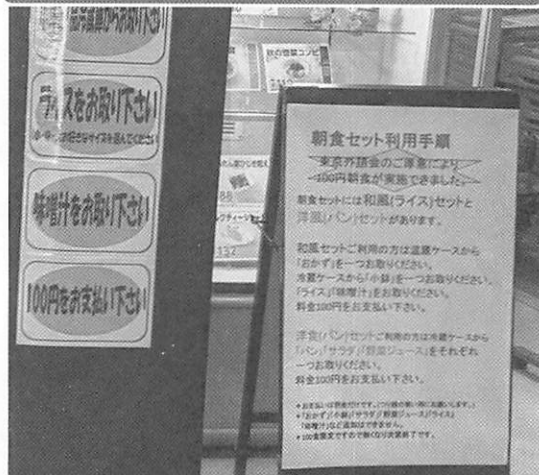
29年度新入学の会員の皆様は、お納め頂
きました4年分の会費の期間が終了致しま
したが、引き続きご協力くださいますよう
お願い致します。

※ ひとりでも多くの方々の納入のご協力
をお願い致します。

一般会員：年会費 3,000円

協賛会員：年会費 20,000円

キャンパス日記 生協で100円定食



現在、キャンパス内の生協食堂では、コロナ下での食生活支援のために、先着100名に100円で朝食（定食）と夕食（弁当）を提供しています。朝食では和風と洋風をチョイスできます。

職員の方に尋ねたところ、弁当はすぐに完売、朝食のほうは毎日7～8食が出ているそうです。ほとんどが和風のようなのですが、もちろん留学生も利用しています。



この企画は、外語会からの基金によって運営されています。ちなみに8ページ以下で報告したフードパントリーも同会の基金により運営されています。外語会による留学生を含む学生に対する積極的な支援に対し、支援の会から感謝と、敬意を表します。（10月28日 谷記）

支援の会の活動等についての最新情報は、会のホームページならびにフェイスブックでも紹介いたします。ぜひご覧ください。

また、ホームページや会報の充実のため、積極的な投稿を心よりお待ちしております。

編集後記

今月号から広報の担当になりました山根です。昨年度から今年に向けてコロナの影響でほとんど会の活動としては何もできませんでしたがやっと収束方向に向かっているようです。来年度からはこれを踏まえてさらに留学生の皆さんに対し、何ができるか模索してできなかった分をカバーして活動していきたいと思っております。さらなる会員の皆様のご寄付や励ましの声を種に頑張っていきたいと思っておりますので、引き続きお力添えをよろしくお願いいたします。

なお、外国人留学生の寄稿に関しては、従来からの会の方針に従い、ワープロ変換ミスなど明らかに不注意による誤字・脱字の訂正を除き、ほぼ原文のまま掲載してあります。（山根）

お問い合わせ先

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-1-1-2
東京外国語大学国際交流会館2号館1階
留学生支援の会連絡室

Tel: 042-330-5803

Fax: 042-330-5189

Mail: ryugakuseishienokai@gmail.com

Homepage: <http://www.tufsisssa.com>

Facebook: <http://www.fb.me.tufs.issa2>

11月より連絡室を月、木曜日に開室していますが、お問い合わせはメールでお願いします。

会報

Since 1999

【お知らせ】春期バザーについて

2022年度春期バザーに関しては、オミクロン株感染急拡大の動向を注視しつつ、3月中旬までには開催の可否等を決定し、ホームページでお知らせします。

Pick Up
Event2022

留学生支援の会の活動に参加してみませんか？

こんな時だからこそ、オンライン、リモートでの協力、参加をお願いします！

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-2 東京外国語大学留学生支援の会

TEL042-330-5803 FAX042-330-5189

<http://www.tufsissa.com>

Contents

Page1. 1. 巻頭言

Page2. 2. ご挨拶

Page3. 3. 活動報告

(1) コロナ下での生活支援事業の継続・拡大

- 1) 留学生の学び継続を支援する生活給付金
- 2) 協力に対する謝礼としての「生活応援券」
- 3) 投稿小論文6篇

(2) Zoomによる日本語広場の成果

(3) 成人式などでの和装体験

(4) 2022年度春期バザー事業の見通し

Page12. 4. 留学生の声

Page14. 5. 会員から

Page15. 新入会員・ご寄付御礼

Page16. 幹事会から

FOCUS



1. 巻頭言

研究生とともに

世界言語社会教育センター
特任助教 古川高子

2015年、グローバル・アドミSSION・オフィス GAO が立ち上げられた際に、国内外在住の私費研究生の受入方法も大きく変わり、GAO が受入窓口になって希望教員と研究生希望者を斡旋するようになった。当時の林佳世子副学長（現学長）から、このマッチング業務と研究生向けのアカデミック・ライティングの授業を依頼され、その時から研究生と私との交流が始まった。もともと2011年からは日本語科2年生の「論文作成法」、2014年からは大学院の「学術論文演習」を担当していたため、そのノウハウを活かした授業を行うことになったのである。

研究生は外語大所属となり、指導教員の下で勉強することになるものの、正規生とは異なり、基本的に一人で大学院入試向けの受験勉強をしな

なければならない。大学院の合格を目指す競争の中で友達も作りにくい。そういった環境を改善し、異国の地においても研究について話し合える友人を作り、お互いに切磋琢磨できるような授業が求められた。専攻は様々だが、私費研究生に国費研究生も加わったクラスに週に一回集まって授業を受けるという形で行われることになった。一年目が終了する頃、学生たちにこの「研究生用学術論文演習」の感想を尋ねたところ、「もっと前からこういうクラスがあれば良かった」「友達ができた」「論文の書き方が解った」「研究対象が定まった」「週に一回、同じ志を持つ仲間に会えてうれしかった」等々の返答をもらい、彼らにとって大事な授業であることを実感した。それ以降、6年間(春学期・秋学期)、週に二コマから三コマ、研究生とともに歩んできた。

中国、台湾、韓国、モンゴル、中央アジア、ヨーロッパや南北アメリカ等世界各地から日本にやってきて勉強したいと願う研究生たちは、それぞれ千差万別で、共通するのは日本語を使って論文や研究計画を執筆するという点だけである。まずは専攻するテーマに関する日本語論文に馴れることを重視し、図書館に協力してもらって論文や著作を検索する方法を学び、読むべき参考文献を集めることから始めている。日本語能力試験の1級を持っていても、実際に学術的な日本語を読み、聴いて話すのは難しい。研究生に応募する際に研究計画は出すものの、指導教員との話合いでテーマが変わったり、テーマを絞らなければならなくなる。毎年夏休み前には、困った顔をする研究生が何人も出てくる。そのような時でも同じクラスで研究の進んでいる学生や異なるテーマを専攻する学生の報告などを耳にし、ヒントを得る。彼らの勉強上の悩みが授業中に打ち明けられると、私からばかりではなく、他の研究生の中からもそれに対して励ましのコメントや解決策が示される。そうなると一緒にクラスに連帯感が生じ、不安も笑いで消え、また頑張ろうという気持ちが湧く様子がわかる。このような過程を経て無事、大学院に進めた学生とは大学院の授業も含め

最長で4年間顔を合わせ、彼らの成長した姿をみることができた。もちろん、当初希望したようには勉強が進まず、あるいはやむを得ない事情で就職の道を探る学生もいたが、みな日本語で研究計画や論文を繰り返し書く努力をした数年間に得た貴重な体験を持ち、大学院あるいは社会で活躍している。研究生たちがこのように羽ばたくお手伝いするのが私の仕事である。

一昨年コロナ禍に遭遇し、来日できない研究生が増加した。そのため、授業はすべてZoomにせざるを得ず、実際に研究生に会う機会も減った。だが、時差のため、夜中や早朝の授業に参加して努力する学生を目の当たりにして気の毒に思い、またバイト先が減った日本在住の研究生が、学費支払いや生活自体が難しく、勉強もままならなくなったことを知った。そのような事態に陥った2020年初夏、留学生支援の会から、日本在住の私費研究生に給付金を支給してくださるといってお話を伺った。願ってもない申し出に驚くと同時に、支援の会のご厚意に深謝した。今年度も引き続き給付が行われた。バイトが減って勉強を続けることが難しいことを察してくださった留学生支援の会のみなさんに心より御礼申し上げる。

2. ご挨拶

日本への留学というチャンス

京都大学大学院経済学研究科・講師

KEVKHISHVILI RUSUDAN

ジョージア共和国首都トビリシ出身のケヴェイッシュウィリ・ルースダンと申します。2009年4月に留学生として来日してから日本に住んでいます。高校時代から大学学部留学に興味があり、様々な奨学金を調べていました。発展途上国であるジョージアの中所得者層にとって、私費留学は当時も現在も金銭的に非常に難しいです。日本政府の国費学部留学の奨学金の情報を見たときに、人生一度のチャンスだと思いました。日本語の知識がなくても応募可能でしたので、応募しました。

3. 活動報告

合格の通知を受けたとき、とても嬉しかったです。学部入学までに、1年間東京外国語大学留学生日本語教育センターで非常にレベルの高い日本語教育を受けました。日本語のレベルゼロからスタートして、1年後に京都大学経済学部に入學出来ました。

学部時代、ファイナンス工学のゼミに所属しており、卒業論文の研究をきっかけに研究に興味をもち、大学院に進学しました。修士号と博士号は京都大学経済学研究科で取りました。博士課程に在籍していた際に受けた日本社会からの支援をここで取り上げたいと思います。1年目において、JEES 国際理解推進奨学金（少数受入国）（公益財団法人日本国際教育支援協会）の受給者として選ばれました。その1年後、日本学術振興会特別研究員（DC2）として選ばれました。これらの支援のおかげで、生活費と研究費を受け取ることができました。博士課程修了後、京都大学経済学研究科で講師として働くことになりました。現在、学部と大学院の科目を担当しながら、研究に取り組んでいます。専門はファイナンス工学であり、確率過程や統計的手法のファイナンス問題（特に、信用リスク分析）への応用に取り組んでいます。将来も研究者として働いて、レベルの高い研究成果を出したいと思っています。

留学時代、様々な支援を受けたおかげで、勉強に集中することができました。受けたのは金銭的支援だけではありません。例えば、精神的な支えになったのは、学部時代に3年間住んでいた京都国際学生の家です。

留学生支援の会に入った動機は、少しでも留学生の支援に役に立ちたいからです。金銭的支援以外に、留学生にとって集まる場所や交流会は非常に重要だと思います。私の留学経験を踏まえて、住まい探しや日常生活について留学生にアドバイスをする機会があれば是非貢献したいと思っています。

（本会創設以来初めてとなる元留学生の入会を歓迎し、会への挨拶を寄稿してもらいました）

（1）コロナ下での生活支援事業の継続・拡大

前号では「事態収拾も遠からじという希望的観測」から、今後の活動の第1の柱に「コロナ前事業の段階的再開」を掲げました。けれどもオミクロン株の急拡大により、その前提は崩れ、結局、第2の柱としたコロナ下での「生活支援の継続・拡大」事業に専念することになりました。以下は11月から1月にかけて支援の会が外語大の全留学生を対象に取り組んだ、生活給付金5万円支給事業、小論文投稿者への生活応援券3000円配布事業、生活調査回答者への生活応援券3000円配布事業についての報告です。

1) 2021年度第2回「留学生の学び継続を支援する生活給付金」

コロナ禍によるアルバイトおよび家族からの援助の減少で困窮に陥った留学生への給付金支給は昨年6月、今年6月について3度目となります。これまで2回は公的な支援策の対象外である私費研究生を対象を絞り、10万円×10名の枠で実施しましたが、今回は、思い切って対象を全留学生に拡大し、5万円×20名としました。私費研究生数の大幅減少という事実への対応と共に、本会の支援の輪を正規生など全留学生に広げたいという狙いもあります。

申請条件は国内在住で、国費奨学金あるいは授業料免除を受けられず困窮状態にある留学生としましたが、いわば別枠として、育児による生活難を抱えた女性留学生の申請も募集しました。コロナ下での育児と研究の両立という難題に挑戦している女性留学生が少なくとも10名はいると想定してのことです。

11月17日に告知し、11月30日の締め切りまでに38名から申請があり、うち育児中の女性が5名でした。支給者の選考は従来通り会の幹事5名、大学教職員2名からなる選考委員会を設置し、申

請理由、生活費の収支明細を基本資料として審査しました。

12月15日の最終判定会議で21名への支給を決定し、24日までに全員への振り込みを完了しました。21名の内訳は、学部生1名、大学院前期生7名、大学院後期生10名、研究生3名でした。また育児中女性留学生は5名全員が支給されました。

振り込み完了が遅くなったのは、支給者と直接面談してから振り込むことにしたためです。19日の昼には茶菓も準備して支給者に連絡室に集合してもらい、生活の状況を聞くとともに激励する集いを設定し、それに10余名が参加しました。参集できない学生とは、別個に面談日時を設定し、状況を聴取しました。ひと手間かけた感じですが、会と支給者の関係を少しでも深め、彼らの多様な留学事情を知ることができたといえます。

全留学生を対象とするのは初めてでしたが、親からの支援が当然の学部生と経済的自立が当然の大学院後期生、単身生活者と5人家族の母親といった多様な留学生を一括して困窮度などを比較するのは無謀ともいえ、様々な問題点に直面しては、その都度合意を探りながらの選考過程でした。同時に、育児中の女性留学生をはじめとした、留学生の多様性（国籍の多様性とは異なる次元での）を理解する機会ともなりました。また、本学留学生の多数を占める大学院生層に会の存在を認知させる機会にもなつたと言えます。今回の経験を、今後のより広範な留学生の生活支援につなげていきたいと思えます。

2) 会の活動への協力に対する謝礼としての「生活応援券」配布

生活応援券配布事業は、コロナ下での生活支援を、会から留学生への一方向的な給付ではなく、会と留学生の相互支援、相互協力の形で実現することを目的とするものです。留学生からは会が必要とする情報などを提供してもらい、会からは食事や書籍購入の足しになる少額の商品券を提供します。これは経済的な価値の交換ではなく、あくまでも相互支援です。

昨年度は大学生協の商品券3000円分を「生活応援券」としましたが、今年度は留学生の使用しやすいQUOカードとしました。また、協力事業として、昨年度実施した「留学生生活調査」アンケート以外に、「コロナの下での留学」をテーマとする小論文の寄稿を新たに加え、それらの回答者、投稿者に謝礼としての生活応援券をプレゼントしました。

小論文は1000字以上として、11月24日に全留学生に告知し、12月14日の締め切りまでに11名の投稿がありました。投稿者にはクリスマスまでに「応援券」を手渡し、ないしは郵送しました。

投稿数は期待以下でしたが、これは単なる自己紹介や感想文ではない「論文」を日本語で1000字以上という条件が、留学生にとってかなり高いハードルであることを示しています。投稿者の大部分が大学院レベルの中国人学生であったこともそれを裏付けているでしょう。

それだけに、投稿された文章には、各人の体験や問題意識を踏まえてコロナ下での留學生活の多様な側面が、生き生きと描かれており、留学生の現状を理解し、これからの支援のありかたを探るうえで参考になるものです。下に6名の文章を掲載したので、お読みください。

「生活調査」の方は、小論文事業の処理が完了した12月27日に告知しましたが、1月17日の締め切りまでに65名からの回答を得ました。応援券は1月下旬に手渡ししました。

回答の分析はこれからですが、昨年の調査と比較し、コロナの2年が経過して留学生の状況が経済的、心理的により深刻化していることが分かります。特にアルバイト収入の減少や家族からの支援の減少による経済的困難、長期にわたって帰国できないことや、引きこもり生活による孤立感、経済活動停滞や就職難などからくる将来不安が累積しているようです。集計、分析の結果は、HPあるいは次号の会報を通じて紹介します。

(会長 谷和明)

3) 投稿小論文 6 編

コロナ禍のなかで体験した困難

S(中国 大学院博士後期課程 2年)

0. はじめに

前回帰国してから5年目になった。

2019年の11月に航空券を購入して一時帰国の準備をした記憶は私の中にまだ鮮明に残っている。2年ぶりに帰国することを思うと眠れないぐらいワクワクしていた一ヶ月だった。しかし、同年度の12月初旬に第1例目の感染者が報告されてから、コロナは僅か数カ月ほどの間にパンデミックと言われる世界的な流行となった。そのせいで未だに帰国できていないまま。

往復の飛行機チケット代が60万円を超えているほか、日本の入国時の水際対策とは違って、中国は14日の自主隔離だけでなく、14日の自費隔離(政府指定の宿泊施設での隔離)もあるので、更に30万円ぐらいがかかる。23万円の学費を捻出することすらできない私にとっては、帰国は夢になった。

本小論文では、この帰国できないコロナ禍のなかで体験した留學生活の困難について少し語りたと思う。

1. 2種類の「オンライン留学」

新型コロナウイルスの感染拡大によって去年の3月以降、留学生をはじめとする外国人の新規入国は原則停止してきた。大学における学生交流の動きも無論止まった。

私の友達の中には、受験して合格して以来、2年間にわたって母国で待機している女の子もいる。彼女は私の留学体験を聞いて妬ましさを感じる一方、私はせっかく日本に来たのに対面で先生や友達と会えないということに苦しみながら終わりの見えないZOOM授業を受け続けてきた。

国にいながら遠隔で日本の大学の授業を受ける友達は、留学できているが日本にはまだ来られないまま。日本にいるが遠隔でしか大学の授業を受けられない私は、留学できてはいるが日本に来

た実感はない。多彩なキャンパスライフどころか、毎月の家賃と生活費を稼ぐだけで精一杯だった。

留学は、ただ言語や知識を得るだけでなく、現地の人との交流や、文化に直接触れることもできるという点が一番の特徴だと言われるが、このような「オンライン留学」は本当に満足に欠けると思う。しかし、このような特別な体験も、十年後、二十年後に思い出すと大変貴重な思い出になるのではないかと思われる。

2. 経済面

現在は世界各国がコロナ危機による落ち込みから回復の動きを続けているが、言うまでもなくこの2年間はコロナで経済的な打撃を受けた人は少なくなかった。私は学生であって大きな経済的損失とは言えないが、コロナで仕事を失い、収入が半分以上減ったことがあった。

2018年の春から、私は大学との連携で、ユニクロの本社で中国から研修に来た中国人店長たちに日本語を教えるプロジェクトに参加し、約2年間ぐらいそこで日本語を教えていたが、コロナの影響で中国にいる店長が来日できず、そのプロジェクトはやむを得ず無期限休止になってしまった。そのため私は仕事を失い、一時期貯金だけで生活することになった。

無収入期間中の面白いエピソードとして挙げられるのは、ある日毎月3400円の国民健康保険料の支払い用紙が届き、そんな余裕がないので急いで市役所まで行って税金の免除を申請した結果、翌月に改定後の支払い用紙が届いたが、前年の収入が割と高いので、月に7100円になってしまった。当時は本当に困っていて、その新しい支払い用紙を手に握ってバスで移動中にもかかわらず涙がボロボロと落ちていたが、今は面白い留学体験談としてたまに人に言うようになった。

3. コロナの下での婚活

今まで恋愛経験なしの私は、今年の10月1日から、29才になった。

女の子としてはそろそろ婚活しなきゃいけないかなとか思う年齢だが、コロナで良い出会いが

なかなかないので、今年の3月にいったん帰国してお見合いとかしようかと思ったが、冒頭に述べたように、帰国が困難な時期でもあるので、今は学業を優先して博論に没頭している。

周りには、同じような境遇にある友達が何人もいたので、みんなで励まし合いながら頑張っていきたいと思う。

4. 終わりに

以上、コロナの下で私が体験した困難などについて述べてみた。色々あったが、人生は様々な体験・経験を経て、彩りを得る過程だと思うので、特別な人生体験として大切にしていきたい。

コロナの下での留学

チョウ カンゲン(中国 国際日本学部3年)

新型コロナウイルスは人々の生活に莫大な影響を及ぼしています。毎日マスクを着用したり、社交距離を保ったりすることは、もう生活の一部になりつつあります。留学生として、このようなことはもちろんありますが、他にもいくつかの困難に出会っています。

例えば、去年の一年間母国に居たので、ビザの期限が過ぎてしまいました。そのため、しばらく日本への再入国はできない状態になりました。その時点はちょうど春学期の始まりなので、やむを得ずすべての授業をオンライン授業にしました。一方、春学期の授業のほとんどはオフラインで開講されていたので、受けようとしても、なかなか受けられないのは現実です。これを乗り越えるには、何人かの先生に50通ぐらいのメールを送り、二人の先生の許可を得て、対面の学生と一緒にオンライン授業を受けました。また、秋学期は日本に帰ったら、春学期より倍以上の授業を受講して失ったものをできるだけ補うように頑張っています。

もう一つ問題になったのは、賃貸の部屋です。私は日本にいないにもかかわらず、家賃は毎月引き落とされます。誰も住んでいないのに、ただお金を払っているのは、少しもったいないなと思

ました。しかし、契約を重視する日本では、私の都合でお金を支払わなければいけないので、ずっと支払い続けてきました。私は中国でアルバイトをし、稼いだお金を部屋の賃料に使いました。日本に帰った日、まず一つ目にやったのは埃まみれの部屋を掃除しました。幸い、ゴキブリは発生していませんでした。

今年の秋、やっと日本に帰ることができ、一年ぶりに友達に会えるのはとても嬉しかったです。みんなの笑顔は私の励ましになります。同時に、コロナ禍の中の日本は、中国と違うところも感じました。日本はもし感染者が出た場合、その人は重症ではない限り、自宅療養をさせるケースがよく見られます。それに対して、中国ではたとえ一人の感染者が出たとしても、その地域のすべての人は全員PCR検査をしなければなりません。自宅療養は絶対させません。自宅療養をすると、周りの人に移る可能性が高いので、早いうちに病院に入れます。また、電車に乗る時、周りの目に気にせず、全くマスクをしないおじさんをたまに見たことがあります。大多数の人は、きちんとマスクを付けているので、安心できます。

コロナ禍の中、数多くの人は大変な生活を送っていることはよく知っています。一日も早くコロナ禍は収束できるように心から願っています。

自分自身と向き合う

韓 昇熹(韓国 大学院博士後期課程4年)

コロナ禍で人と会う機会が普段より少なくなり、一人で暮らす時間が長くなった。私は、生活の大半を、興味のあるテーマの学術的なシンポジウムへの参加や志を同じくする仲間たちとの勉強会への参加準備に使っていた。しかし、現在ほとんどのシンポジウムがオンラインで行われている。また、zoomで勉強会をしている勉強会もあるが、その他の勉強会はコロナ事態が落ち着くまで延期することになった。一生懸命に勉強をしても意見交換を行う機会がないので、勉強への意志・意欲が弱まっていくのである。

ここで、考えてみたいものがある。勉強会の中
止などで学問に対する意欲が下がるというこ
は、自分のなかで誰からも評価されたいとい
う気持ちがあることを意味する。評価されたい
欲望自体は悪いものではない。誰だって持っ
ている感情であり、研究を続けるモチベーシ
ョンとなることもあるだろう。しかし、評価さ
れたい欲望の裏に隠されている感情も見据え
る必要がある。誰からも評価されたい気持
ちというのは、裏を返せば、誰よりも優秀
である優越感を感じたいことにもつながる。
ここまで話が進むと、優越感を感じるため
に勉強をしているかのようにも考えるよう
になる。

なぜ、そこまで追い詰めて考えるようになった
かという、誰のための、何のために私は勉強
をしつづけているのか、ということについて考
えこむことがよくあるからである。どこにも
行かず、一人でごろごろする時間が多くなっ
てきたから、しばしば今までの自分がやって
きたことを振り返る時がある。言い換えれば
、自分自身と向き合う時間が長くなったとい
うことである。勉強会ができなくなったこと
についてなぜ、それほど悔しく思ったのか、
もしかして、誰かに見せるための勉強をし
てきたことではないのかということに気づい
たからである。本来、誰でも教えてくれな
い自分自身の問いに対する答えを探すため
に勉強をはじめたはずである。一刻も早く
コロナ禍が収まることを願いながらも、コ
ロナ禍は人々の移動を統制しているようだが
、このように自分自身の研究と向き合う機
会を与えたという点では得るものもあるよ
うだ。

ワクチン接種率が国民の 70%以上に達した
にもかかわらず、韓国ではまだコロナ感染者
が増えるばかりである。ワクチン接種さえ
できればコロナ禍は落ち着くだろうとい
う予想は見事に外れてしまった。それは、
比較的ワクチン接種率が高い欧米でコ
ロナ感染者が増えているというニュース
を見ても明らかである。

しかし、なぜか日本ではコロナ禍が落ち
ついて以前のように飲み会もできるよう
になり、まだ少

人数であるがわいわい皆で話す機会が増
えるようになった。オンラインで行われ
るシンポジウムは移動する手間と費用が
かかるとなく、有益な情報をすぐ手に取
ることができる点では大変便利だが、や
はり対面で行われないと議論が盛り上
がらないだろうということを改めて実感
するところである。いつかまた自由に海
外に行って様々な国々の研究者と交流
する夢を見る日々を過ごしている。

コロナ下の友情

楊柳岸(中国 大学院博士後期課程 3年)

いまでも、2019年12月31日の夜、友
達たちと一緒に家で手作りの火鍋を食べ
ながら、テレビ番組を見て、翌日一緒
にディズニーランドで楽しく遊んでい
たシーン、また、その時、2020年は
良い年を心から祈っていた気持ちをも
鮮明に覚えている。しかし、そのあと、
全世界は変わった。最初の時、コ
ロナがもうすぐ収まると思ったが、
緊急事態宣言によって、はじめて、
コロナの恐さを実感した。特にオン
ライン授業が始まった後、日常的な生
活もできず、友達たちと会えず、毎
日狭い部屋に閉じこもっており、外
での時間もマスクを掛けなければな
らない。長い間、国の両親に会いた
くても帰れない。こんな毎日を送っ
ていた私の精神状態はだんだん悪く
なって、鬱病の傾向も出てきた。

昨年の6月、梅雨の季節に弱い私は
太陽の光さえも楽しめないため、一
人泣いたりして、抱え込んで、人生
の意味とは何だろうなどの問題ば
かり考えていた。その時、外大の知
り合いとの話を契機に、一緒に zoom
で読書会を始めました。その中
には、コロナで中国に滞在していた
後輩、同じゼミの知り合い、他の
大学の人もいます。一緒に興味あ
る本を読んで、好きな話題について
話す。皆は多少コロナの関係でス
トレスがたまっており、落ち込ん
でいる。しかし、こういうオンライ
ンの時間のお陰で、面白い話をま
わすことによって、憂鬱がすこし
ずつ紛らされる。

生活の面では、コロナの関係で大きな影響を受けた。私はもともと中国人向けの塾でバイトしていた。入国制限の関係で、塾の営業は影響された。その結果、私の収入もだいぶ減少した。それまでの生活は裕福とはいえないが、好きなままに生活をしてきた。お金のことで心配したことはなかった。貯金も殆どなかった。正直に言うと、昨年になって、「諸行無常」という意味がはじめてわかってきた。この先の道への不安を抱えつつ、一人で生活を維持しなければならない現状に直面している。読書会の友たちはいろいろな節約術を教えてくれた。毎日の生活費も大幅に減少した。その上、外大は様々な支援を提供してくれた。何回も開催されたフットパントリーは本当に役に立った。毎日の食事を安く済ませることができた。

今現在、コロナ生活はまだ続いているが、私は昨年ほど怖がっていない。何故ならば、一緒に闘う友達がいるからである。それだけではなく、災難に対抗できる勇気を持っているからである。「塞翁が馬」という諺のように、災難はある意味では、転機ともなれる。これからも、より積極的に窮境とピンチに向き合って、そして、友達と一緒に手をつないで乗り越える。

コロナから立ち直った私

ショウシキン(中国 大学院博士前期課程 1年)

コロナウイルスは2019年12月以後、中国湖北省武漢市を中心に発生し、短期間で世界に広がってしまったウイルスである。そして、中国の隣国である日本ももちろんこのウイルスの侵食から逃げられなかった。去年の4月に日本での感染者数が爆発的に増え、日本政府は緊急事態宣言を出した。

この緊急事態宣言に伴って、日本でのニュースはコロナウイルス関連のものばかりになってしまい、そしてウェブで見られるニュースのコメント欄には中国人の悪口を書く人もたくさんいた。私は中国から来た留学生だから、このような差別的なコメントを見て、非常に心が痛んで一時的に

落ち込んでしまって、生活も暗く感じて、何もしたくなくなってしまった。

このような状況で、私を立ち直らせてくれたのは、まず私の生徒たちだった。私はアルバイトで中国語を教えているが、以前から教えてきた生徒たちはこのような出来事が発生したにもかかわらず、中国語を習うのを諦めることなく、逆に私の家族や私に気を遣ってくれた。「ご両親は大丈夫ですか」と聞いてくれた。そして、コロナ期間中で新たに中国語の勉強を始める生徒もいた。彼の目標は中国に旅行に行くことだった。私は最初「なんで中国を嫌わないの？なんで私を差別しないの？」と不思議に思いながら、授業をオンラインの形で提供し始めた。それから、生徒たちの明るさに影響されて、だんだんネガティブな気持ちから目覚めた。そして、私は周りの日本人が本当に中国人である私のことを嫌がるのかを確かめようとした。その観察の結果は喜ばしかった。

いつも通っている食堂のおじさんはいつも通り美味しい料理を作ってくれた。

いつも利用している散髪屋のお姉さんはいつも通り綺麗に髪を切ってくれた。

大学の先生や友人はいつも通り親切に接してくれた。大家さんはまた手作りのケーキを焼いてくれた。日本政府は多額の学習支援金を出してくれた。

私が中国人であることにもかかわらず、周りの日本人は私に文句を何一つも言わずに私の留学生生活を支えてくれた。これに気づいた時、私は久しぶりに微笑んで、そしてこう考えた。「生活の暗い一面だけを見てはいけない。ドイツ哲学者のシラーが言ったように、「太陽が輝くかぎり、希望もまた輝く！」。太陽がまだ輝いているから、落ちてもまた昇ってくるから、私も立ち直って、日本に住んでいる一人の人間として全身全霊で応えないといけない」と思った。中国や中国語に興味を持ってくれた生徒たちに、私の生活を支えてきた人たちに、そして、何よりもこの日本社会に。

体験と観察を通じての提言

チンセン(中国 国際社会学部 4年)

今回のコロナにより、様々なイベントや活動が中止を余儀なくされました。多くの留学生が日本に入国できなくなり、遠隔授業を通して授業を受けるようになりました。また日本で在住の留学生の多くも、経済的な困難に直面するようになりました。たとえば、コロナの前にはアルバイトにより生活費を補う留学生が、シフトさえ入れることができれば生活費に困ることはありませんでした。しかし、コロナが来たあと、アルバイト先(特に飲食店)にとって人を雇うことがマイナスな面が多く、シフトを入れなくなったり、そして新規のアルバイトを見つけにくい状態となりました。最悪の場合、条件のよくないアルバイト(大学から遠いなど)を無理やり入れると、勉強に悪影響を及ぼすこととなります。以前私の観察では、アルバイトがないとまったく生活できない留学生が、条件がよくなってもアルバイトをしたり、そのため授業でもかなり疲れが出そうで、時々寝てしまいます。そんななかでも、授業で目覚ましのためたくさんの方の方法を試しました。

今回のコロナは留学生だけではなく、日本人にもよくない影響をできいますが、しかし学生向けの支援や、大学内の援助がたくさんありました。日本にこれない学生にも遠隔授業で助けてあげました。大学内の相談のためのところをはじめ、フードパントリー、食券配布、さらには大学内の100円朝食もありました。その中でもっとも助かったのは、大学内の100円朝食と夜のお弁当です。私は、生活費を節約するとき、よく食事から節約しようとしていますが、どのようにバランスを考えながら節約することがよく知りませんでした。この100円食事ははじまる前に、私はよく近くのコンビニではなく、遠いスーパーでの食材を買っていますが、たまごとスパゲッティだけで、食材の種類は決して多くありませんでした。またお肉と魚はあまり買いませんでした。しかし、大学でこの体験と観察を通して、わたしは日本での留学

生に対する支援は、とても多いと感じて、留学できてよかったと思います。コロナは自分の留学生活に対しては一つの困難ではありますが、さまざまな支援によりあたたかさをも感じた機会でもあり、困難を乗り越えて成長する機会でもあります。

もし一つの提言をするならば、私は衣料面での支援を提言したいです。私の観察では、古布として捨てる服の中でまだ着ることができることが多く、また大学での交換留学生が帰国する際にいらぬ服も多いと考えられます。そのような服を古布として捨てるのではなく、留学生支援会により集め、服を必要としている留学生に配ることはいいことかもしれません。これは衣料面の支援になるだけではなく、留学生支援会に金銭的な負担も少ないと思います。さらに、服をあげる人は小さなメッセージカードを書きたい場合中に書くと、服をもらう留学生もそのつながりを感じるということができると思います。

ここで掲載できなかった5編は、会HPの「交流室」⇒
「留学生の声」ページでお読みいただけます。

(2) ZOOMによる日本語広場の成果

前号では昨年4月に再開した対面形式での日本語広場をコロナ第5波の拡大により中断せざるを得なくなったこと、けれども10月になり再度再開したことをお伝えしました。11月には、広場の講師を無償で派遣してくれているNPO国際社会貢献センターの「留学生支援グループ」の新しいコーディネーターの方が挨拶と状況視察に連絡室に来室されました。そして日本語広場の意義について理解され、今後も従来通り講師を派遣して下さることになりました。それに勇気づけられ、新年にはさらに拡大しようと意気込んでいたのですが、オミクロン株の拡大により、1月からまたもや中断ということになりました。

とはいえ、コロナ下でもZoomによる日本語広場は講師の関先生と受講者の熱意により、継続さ

れてきました。受講者は本学の外国人教員のご夫人ですが、広場での学習の成果として日本語検定4級試験に合格し、さらに上級へのチャレンジを目指しています。そんな Zoom 日本語広場の様子が伝わってくる、二人からの寄稿を以下に掲載します。

日本語で国際交流

日本語広場講師 関尚子

留学生支援の会で4年間、外国人教員やその配偶者の日本語指導を担当してきました。日本語広場では、大学で日本語の授業を受ける機会のない外国人教員、研究者やその家族の日本語支援をします。文字が面白そう、買い物や病院で使う日本語を知りたい、日本人とコミュニケーションしたい、そして教員ご自身の日本人学生がよく間違える文法を解明したいなど、学習目的は多様です。気軽に日本語に触れていただけるように、日本語の指導に加えて、特有の日本語から日本人気質に発展させたり、季節の行事を紹介したり、食べ物を味わっていただいたりなど、そして学習者からも国の話をしていただき、教えるというより、一緒に楽しませていただいています。1対1で一定期間担当するために、きめ細やかに対応できます。

現在担当しているのは、ウルドゥー語(パキスタンの公用語)教員の奥さま、ムニーザさんです。お子さまが日本の学校に通われ、お母さん同士の交流があり、ご自身の日本人の友だちもお持ちです。向上心が高く、学校からの配布物を読む努力をされ、読む力の伸びにつながっています。(読解は非漢字圏の学習者には難しいことです。)何度かお家に招待していただきパキスタン料理をご馳走になりました。また、私の家にもお呼びして家庭料理を紹介し、国際交流を楽しんでいます。2020年3月、コロナで突然大学への入構が禁止され日本語広場の活動も中止になったときに、ムニーザさんからの提案で、オンラインでクラスを始めることにしました。私にとっては未知への挑戦でしたが、オンラインは利便性が高いだけでな

く、1対1では学習効果に対面との差を感じないことが、大きな発見でした。むしろ、パソコン上のファイルや音声、インターネット等を共有でき、一部の情報を紙で印刷するより効率的とさえ感じます。

コロナ禍で人との接触が制限されている期間、私たちは毎週オンラインで顔を合わせ、勉強以外にも多くを語り合いました。それは双方にとって日本語の勉強以上に有意義なことだったと思います。コロナの不安が残る中、引き続きオンラインで交流を続ける予定です。お役に立てるよう楽しく努力して参ります。

My Experience in Foreign Country

受講者 ムニーザ・カーン (Muniza Khan)

私はムニーザ (Muniza) です。パキスタン人です。2人子供がいます。主人は東京外国語大学で働きます。ウルドゥー語の先生です。3年前に日本に来ました。日本は2回目です。子供たちは日本で生まれました。小学校と中学校にいます。

前のところと今のところは違います。前のいえの近所の人は、英語を話しませんでした。だから私はちょっとさびしいと思いました。その時、私は日本語をならおうと決めました。はじめは日本語がむずかしいと思いました。だんだん日本語がたのしくなりました。私は日本語を話すことができました。5年後、私は私の国に戻り、日本語を忘れてしまいました。2回目日本に来ました。私は日本語がぜんぜんわかりませんでした。なにをすればいいでしょうと思いました。日本の生活はほんとうに難しいと思いました。とくに日本語が話せない時。だから、もう一度日本語を勉強すると決めました。「どこで日本語を習うことができるかわからない」と思いました。主人の大学に聞いたら、volunteer がたくさんいますから外国人を助けると言いました。そして、大学で日本語を勉強することができました。私の先生は同じ大学で働きます。名前は関尚子です。親切な先生で、せいかくがいい人で、おこることがありません。

私の先生はウルドー一語もちょっとわかって話します。私は先生と水曜日に勉強します。私の先生は試験に合格するのを手伝ってくれました。そして私は去年7月4日に JLPTN4 のテスト受けて、合格しました。ほんとうにびっくりしました。つぎはN3のテストを受けることにします。

日本の生活と私の国の生活は本当に違います。日本の暮らしを理解するために友達と話したいと思いました。今までたくさんお友達ができました。私のお友達はしんせつな人です。時々私たちは一緒にコーヒーを飲みに行って、いろいろな生活について話すことができます。私は時々助けをもとめます。たとえば、子供たちの学校から、すべて日本語でかかれたおおくのつうちを受け取りました。友達はいつも私にそれを説明してくれました。私と私の家族はみんな日本での生活をたのしんでいます。2年前私たちは北海道へ行きました。冬は本当に寒くて、きれいです。子供たちはスキーが大好きですから行きました。あとレゴランド、大阪、京都も行きました。日本の海もきれいです。でも残念ながらコロナのせいで海には行ったことがありません。本当に行きたいです。今年はそのができるといいです。もっと日本をはっけんしたいです。



関先生&イムーザさん

(3) 成人式などでの和装体験

TUFS の留学生にも成人式の招待状が届きます。そして希望者に振り袖を着せています。ここ 10 年位前から続いていたのが、去年は新型コロナウイルス流行の為、直前で式典がキャンセルされ、残念な思いをしました。

留学生も浴衣は着た事があるけれど、振り袖はなかなか着るチャンスがありません。今年の成人式には、府中市に 4 人、武蔵野市会場に 1 人の計 5 人が振り袖と男性は羽織袴で参加しました。下の写真は府中の会場での晴れ姿です。



府中市の成人式会場前で

当日はそれ以外に、去年の成人式に着られなかった 2 人と振り袖を着てみたい 5 人、合わせて 7 人にも振り袖を着て戴きました。多少サイズは合わないまでも皆さんとても喜んでくれました。その一人、南アフリカ出身のリサさんが感謝と挨拶のメッセージを届けてくれたので、英文ですが「留学生の声」ページに掲載します。

2年前までは12月に文化交流会というイベントがあり、茶道、華道、書道、着付け教室と日本文化を体験する機会があったのですが、コロナ拡大のせいで止むなく中止になりました。来年度は出来る事を祈っています。(幹事長 井上久美子)



成人式に出席した5名の留学生
(交流会館2号館玄関前)



他の学生も加わって晴れ着姿の披露

(4)2022 年度春期バザー事業の見通し

今号では春期バザー実施について具体的なお知らせをする予定でしたが、オミクロン株急拡大を受け、実施の可否を含めた決定を3月上旬まで延期することとします。

この2年間、少なからぬ会員からバザーについてのお問い合わせや物品提供のお申し出を受けました。食費や衣料費を節約して暮らす留学生からもバザーを要望する声が届いています。

こういう思いに応えるためにも、今後の事態の好転を待ち、時期を5月以降とすることも視野に入れて実施の可能性をギリギリまで検討します。決定の遅れにより、皆様にご心配をおかけし、お手数を増やすことを恐れますが、事情をご賢察のうえ、3月中旬のHPでの連絡をお待ちくださるようお願いいたします。

4. 留学生の声

日本とスリランカの架け橋になりたい

ラナシンハ・カナッタゲー

パヴィラ・デーシャーニ

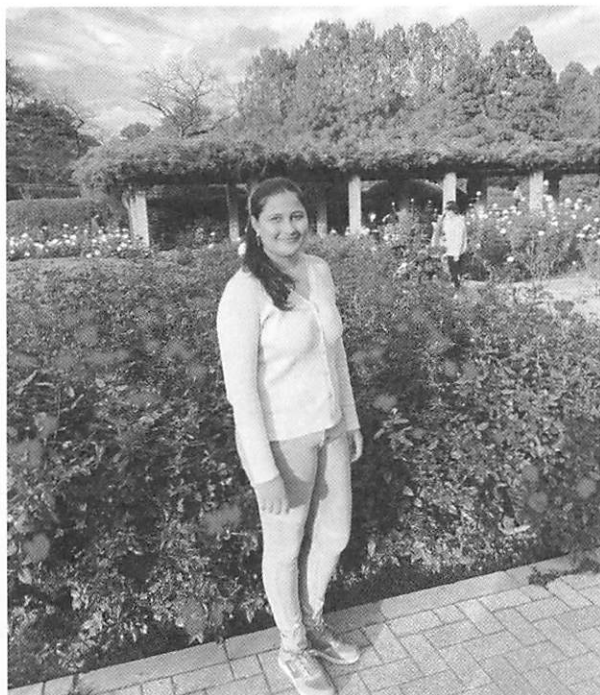
大学院博士前期課程1年生

私はラナシンハ・カナッタゲー・パヴィトラ・デーシャーニと申します。南アジアの島国であるスリランカの出身です。中学校生の時に知り合いから日本語を紹介され、2008年にスリランカのコロombo市であるヴィサーカ女子学校で日本語を勉強し始めました。私の母語であるシンハラ語と全く違う日本語の文字はじめ、挨拶の表現や日本文化に興味を持ち始めました。将来日本語の先生になりたいという希望を持って、2011年にスリランカの外国語を学習のため専門の大学であるケラニヤ国立大学の現代語学科に入学しました。一年生から日本人の先生方から日本語を教えていただき、日本語に関する興味が深くなりました。大学の時の文化祭では日本の伝統的な踊り、日本料理を作るなど楽しい時間を過ごすことができました。また、日本人の大学生との短期間の交流プログラムなどに参加できたことからいつか日本に留学したいという気持ちがますます強くなりました。2015年に大学を卒業して4年間スリランカの旅行会社で日本からいらっしゃるお客様の担当者として働きました。

2020年4月に東京外国語大学の研究生として入学しました。2021年3月に研究生を修了し、東京外国語大学博士前期課程に入りました。日本に来日したのはコロナのピークの時日本で生活が大変になったこともありました。一人暮らしの生活を始めたから色々な問題を直面しました。しかし、研究生の時外大の先生方はじめ留学生と日本人の大学生のおかげで楽しく過ごすことができましたと思います。大学で行われる日本語の予備教育の授業で日本文化について深く勉強ができ、興味深くなりました。また、日本人と留学生との友

達もできたのでとても嬉しいです。国際社会コースに所属し、スリランカの日本語学習者と日本人の大学生の間の異文化コミュニケーションの能力向上に関して研究しています。卒業後、日本で活躍し、スリランカに戻って異文化コミュニケーションの相談者として日本とスリランカの架け橋になりたいです。

入学後、「フードパントリー」について大学のホームページで見たことがありますが、東京外国語大学にある留学生支援センターについて聞いたことがありません。国境を越えて自分の文化や生活様式と全く違う国に留学する時、あらゆる問題が起こるのが当然であるため大学では留学生向けの支援センターがあるのが大事だと思います。私のような一人暮らしの生活を始まる学生のための支援があれば安心します。また、現地で困っていることがあれば、相談を受けられる、または、留学生のことを聞いてくださる場所があるのが必要だと考えます。しかし、留学生はこのような支援センターが大学にあることあまり知らないと思います。そこで、支援センターの情報をもっと共有すれば、大勢の留学生に支援を与えることができると思います。私もこれから実際に支援を受けてみたいです。これからもよろしく願いいたします。



The ISSA made me feel at ease

Lisa Sanders

Research Student for DC

My name is Lisa Sanders. I'm from South Africa, and I arrived in Japan in November 2021. I'm currently a research student at TUFS, and I hope to begin my doctoral studies in April 2023 after studying more Japanese. My field of interest is translation studies, specifically creating subtitles for movies and TV series.

I was diagnosed with cancer twice during my studies, in 2012 and 2015, which forced me to hold back or change most of my plans and interfered with learning Japanese, but I obtained my master's degree in 2018 from the University of Pretoria with my thesis about the translation of the famous Studio Ghibli movie, *Sen to Chihiro no Kamikakushi*.

For a few months, I worked at the Centre for Japanese Studies at the University of Pretoria, where I was very fortunate to meet a few wonderful professors from TUFS. They told me a lot about TUFS, and, for the first time, I seriously considered studying in Japan. After plenty of planning and research, I applied for the MEXT scholarship in 2020. I was thrilled when I was selected!

Due to COVID-19, I started classes in October 2021. It was a bit challenging, as the time difference meant that I was taking Japanese lessons at 01:30 am on some days, but it was an exciting experience. My classmates were also attending online from all over the world, and the teachers were friendly and kind and made the lessons engaging and fun.

When I finally arrived at the TUFS campus at the beginning of December, it was a wonderful moment; I felt so hopeful for the start of my life as a TUFS student. Since then, I have met so many amazing people. I have a physical disability as a

result of my cancer, so I was nervous about travelling to Japan. I thought I might face many obstacles, but so far, even if some things are a little challenging, everyone is very kind and helpful.

For example, I had the chance to wear a kimono at a cultural event organized by the TUFSS International Student Support Association (ISSA). When I first heard about it, I was worried that I wouldn't be able to put on a kimono because of my disability; however, the ISSA made me feel at ease. The ladies who helped to dress me were very kind and understanding, and I thoroughly enjoyed the entire process. When I looked in the mirror, I was amazed to see the beautiful way they had dressed me!

I also sincerely enjoyed chatting with everyone in Japanese and learning more about Japanese culture from the volunteers and staff. I hope to participate in more cultural events by the ISSA in the future. I also found out that the ISSA provides support to international students with the everyday challenges we face. I feel relieved knowing that if I have any concerns while studying in Japan, the ISSA is here to help.



振り袖姿のサラさん(左)と友人のザンビアの学生
(交流会館2号館玄関前)

5. 会員から

海外ボランティアを通じて感じたこと

幹事 米山智榮子

以前、ウクライナのオデッサ国立大学で1年間、日本語教師をしました。西欧の国々には何回か旅行で訪ねましたが、東欧のロシア語圏であるウクライナと云う国は、名前は聞いたことはありませんでしたが世界地図で確認するまで知りませんでした。映画通の方は「オデッサ ファイル」という名画の中で、ポチョムキンの階段と云う有名な階段が出てくるのでご存じかも知れません。

知人の紹介により1年間の約束でオデッサ国立大学国際関係学科の日本語教師として赴任しました。この1年間は私の人生にとってかけがえない素晴らしい経験を積ませてもらったと思っています。国民の大半はロシア語を話し、ポーランドに近い西ウクライナの人達は頑なにウクライナ語を話します。学生はそれまで日本人に出会ったことが殆どなくネイティブの正しい日本語を聞いたことがないということで、毎日午後の一コマ日本語の授業を行いました。生徒はクラス十八人位で生徒の多くは真面目で熱心に勉強し、いつの日か日本へ行きたい、日本の国を見たいという希望を強く持っています。週に二回午前中、希望者は私の家で復習や予習をしました。後にこの学生の中の一人は国費留学試験に合格し、東大に国費留学生として来日することができました。又、在日本ウクライナ大使館の外交官として三年間勤務し、一昨年オデッサへ帰国しました。このような経緯もありウクライナとの関係が深くなり、私が帰国してからも、大使館の女性外交官にボランティアで日本語のブラッシュアップの手伝いをしています。昨年八月に日本へ赴任した女性外交官は今回で三回目の駐在となります。彼女がキエフに住んでいる時は、毎日WHAT S A P Pで日本語の勉強を四十分近く行い彼

女の真摯な態度は私に継続する大切さを教えてくれました。現在は彼女の相談役みたいになり、日本の食事、行事、習慣、日本人の考え方を説明し、時には四季折々の日本の美しい場所を案内しています。多分、彼女は私の事を日本のお母さんの様に思ってくれているのではないのでしょうか。(直接聞いてみたことはありませんが。)

海外ボランティアを通して知り合えた多くの人々と交流できる喜びを持たたことは、ボランティアという一つの出会いの賜物であると感謝しています。

東京外大3年間を振り返って

幹事 山根博彦

あれは3年前の4月、娘の入学式に出席し学生の為に何かお役に立てることはないかと学生後援会の理事に立候補した。約4か月後留学生支援の会から会報が届き書面に留学生の活動の案内があったので早速電話して幹事会に参加した。学生後援会の活動は残念ながら1年で終わったが留学生支援の会の活動は幹事として今に至っている。最初の1年は主だった活動は出来ず皆様には申し訳なく思った。ただ感じたことは幹事の皆さんは非常にアクティブな方が多く圧倒された印象を覚えている。娘は1年の冬休みにカナダに3週間の予定でショートビジットに行った。しかしコロナが始まったこともあり2週間に短縮になったが非常に有意義な経験をしたことに娘と共に感謝している。2年目はコロナで全ての授業がオンラインになった。ただ幸いに自宅から学校までドア To ドアで2時間弱かかるので通学自体は身体的な負担がかからず娘と”良かったね”と話した。今年の新入生は入学式も外語祭も自粛という事で非常にかわいそうな思いをさせたねと娘とも話している。

3年目も初期のころはオンラインではあったが今は対面授業とオンラインが1:2の割合である。ただ今思うとやはりFace To Faceで人と会う事、話すことは非常に重要でありコミュニケーション

ンを取ることが非常に大事と思う今日この頃である。会の活動としては昨年の初めまでオンライン開催、個人的な事としては昨年の11月号から広報の担当をさせてもらっている。

また娘は昨年の12月に交換留学生の選考面接があり無事合格した。予定では今年の7月に出発する予定ではあるがまたコロナの兆候が見えてきており親としては折角のチャンスなのだから是非行かせてやりたい。

先日前会長鮎澤先生から会の会報、今までのメールの内容をまとめた冊子を頂いた。読み返してみると今まで苦勞されてこの会を作られた歴史を感じるので大切にしていきたいと考えている。今後これを骨子として肉付けをしていきたい。

今現実問題としてコロナ禍で経済的に困窮している留学生に対して支援の会として緊急給付金、フードパントリー等で援助してきたがまだまだ皆が満足していないと感じている。しかし会として出来ることはしているつもりなのでこのジレンマがある。

今後の留学生の対応に関してはコロナの出方次第ではあるが折角日本に来られているのだからその方の人生において日本にいる間だけはいい経験をさせてあげたい。その為には会として何がベストな方法なのかを考えなければいけないので皆様のご協力をお願いいたします。

ご入会・ご寄付、ありがとうございます

新規加入者

今期は2名の元東外大留学生が入会してくれました。この画期的な入会を喜び、歓迎するとともに、支援された側が支援する側に回るといふ善循環の発展を期待します。

■一般会員(敬称略)

(令和3年11月1日~令和4年1月31日)

ケヴヘイッシュウイリ・ルースダン

徐明煥

寄付者

コロナ禍の続く今期も多くの寄付を頂きました。幹事一同、皆様のご厚情に励まされつつ、それを留学生に届けるべく支援活動に取り組んでおります。

皆様のご支援に、心からお礼申し上げます。

■一般寄付（敬称略）

（令和3年11月1日～令和4年1月31日）

安藤浩行 大島勇次郎 大野貴也

勝又美智雄 金井亜津子 鴻野初恵

鈴木文子 寺田朗子 平山廣二

本望春夫 松下宗柏 米田利民 鷲尾治生

幹事会から

1) 幹事会の開催

以下の日程で幹事会を開催しました。

12月12日（日） 1月23日（日）

2) 書道・華道・茶道の体験

レッスンについて

オミクロン株急拡大および冬学期で登校者が減少するため、3月までお休みします。

3) ご寄付のお願い

感染拡大の長期化により、留学生の困難は累積し、多様化しています。彼、彼女たちが必要とする支援を継続するため、今後ともご支援、ご協力をお寄せくださるようお願いする次第です。

振込先

ゆうちょ銀行

口座番号 00130-3-192674

加入者名 東京外国語大学留学生支援の会

他金融機関からの振込用口座番号は以下になります

当座 〇一九店 0192674

（加入者名は同じです。）

注：ゆうちょ銀行での現金振り込みに手数料110円が加算されることになりましたが、ゆうちょ口座をお持ちならば、振り込み時に「現金」ではなく「通帳・カード」を選択すると、手数料不要となります。

令和4年1月31日現在

会員数：853名

すべての活動は、皆様の年会費とご寄付で行われております。本年度会費を同封の振込用紙にてお振込みくださいますようお願い申し上げます。

平成29年度新入学の会員の皆様は、前納頂いた4年間の会費の期間が終了しており、本年度会費を年度末までに納入いただけない場合は退会とさせていただきます。できれば、会費納入のうえ、引き続きご協力くださいますようお願い致します。

ひとりでも多くの方々の納入のご協力をお願い致します。

一般会員：年会費 3,000円

協賛会員：年会費 20,000円

編集後記

暗いニュースが続く中、今回の会報では元留学生の方が会員になられたうれしい報告ができました。今後もこのような報告ができるように前向きに活動していきたいと思っております。またコロナ禍およびお忙しい中原稿を頂いた皆様に感謝いたします。今後もコロナ禍の状態が続くとは思いますが暖かく見守っていただけたら幸いです。

（山根）

外国人留学生の原稿は、原則としてそのまま掲載しております

お問い合わせ先

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-1-1-2

東京外国語大学国際交流会館2号館1階

留学生支援の会連絡室

Tel:042-330-5803

Fax:042-330-5189

Mail: ryugakuseishienokai@gmail.com

Homepage: <http://www.tuftsissa.com>

Facebook: <http://www.fb.me.tufts.issa2>

当分の間お問い合わせはメールでお願いします。

©Copyright 2022, TUFS International Student Support Association